

育家は籠を明け放されて飛び出さざる鳥の如し。山林に自由を得るよりも籠の内に飼殺しに爲るを欲す、京大法科教授が脱兎の勢を以て進み、處女の形を以て退きしも其の一例にして、政治界及び實業界の狼連に見縊らるよの避くべからざれど、新興國の青年を陶冶するに今一層教育家の剛健なるを望まざる能はず。言徒らに敏にして行之に伴はず、權勢家の曖昧金の一小部を貰ひ受け、之が爲に調査し周旋するの右様にては、其の教を受くる者は推して知るべきに非ずや。今の如くんば少年青年は長じて故さら誘惑せられんとし、利ある處、甲より乙に移り丙に轉じ、娼婦と異ならざるに至らん。——『日本及日本人』

○忠君愛國屋

忠君愛國屋

官に仕へて普通の實業家より富み、國家に於ける勳功を以て榮爵を得たる者が相ひ率ゐる富豪の列に入りては、忠君愛國を營利事業とする者あるも、遽に之を反駁するに苦まざるべきや。

——『日本及日本人』

眞に恐縮するもの

○眞に恐縮するもの

有名無實の輩も虚勢を張りて愉快を感じるが、保護者に對して氣兼ねるが上、若し相應に判斷力を備ふれば、無名有實なる者に對し忸怩たらざるを得ず。微功を賞せられて恐縮の至りとは、謙遜して言ふならんも、中には眞に恐縮すべきあり。實力及び事業の己れに優りて何の賞を受けざるを見れば、愈々恐縮の至りなるべし。賞を受けざる

政治家の
勇進勇退

者は斯かる心の苦勞なし。——（『日本及日本人』）

○政治家の勇進勇退

識見及び才幹の衆に超ゆるも斷じて行ふの勇氣なきは、識見可び才幹の尋常にして突進の猪勇ある者との競争に敗るゝを免れず。政治家は志を決する以上、吾を妨ぐる何者も無しとの意氣を以て進むべし。されど進んで自ら益せず、人に益せず、寧ろ退くの自他に益する場合には、宜しく斷然退くべく、急流勇退といひ、急流を徒渉しても退くべし。退くは進むより容易にして、問題と爲るも少けれど、勇進の必要なれば勇退も亦た必要なり。世に赫々の功ありて末路の甚だ振はざるあるは、概ね勇進して勇退せざるに座す。——（『日本及日本人』）

曲學

○曲學

頻りに忠君を口にし、帝王の神權を説けば、勢力家の覺え目出度く、勳爵を貰ひ得るが、國家の爲めと信ぜば飽くまで盡力すべく、毀譽褒貶を顧みて避くるを要せずとも、斯くして勳爵を受くる者の多く、勳爵を受くるが爲めに斯くせりと解せらるゝも致し方なし。昔より宮廷に如何はしき者の潛み、コールチアは幫間を意味し、コールテザンは醜業婦を意味するに至り、特別の事情なき限り、權門勢家に悦ばるゝは、性格の極めて疑はしとして可なり。覺え目出度き者の平生を察すれば、思ひ半に過ぐ、御用學者の意見は勢ひ曲學の最も甚だしき者たらざるを得ず。——（『日本及日本人』）

老政治家
と少壯政
治家

○老政治家と少壯政治家

老政治家の進んで難局に當り、少壯政治家の進んで大事に任ずるは、他の方面の老人及び少壯者を刺戟すること少からず。英國には八十六にして首相たりしあり、二十六にして首相たりしあり、老人は依りて以て勵むべく、少壯者も依りて以て勵むべし。我が日本は遂に此の如きなきか、此の如くなるを得ざるか。——〔日本及日本人〕

選舉費廉
不廉

○選舉費廉不廉

候補者の競争するや、肝膽を碎き智囊を絞るは勿論、財を費すことも少からず。平均幾何なるやの明白ならざるも、約一萬圓といふは當らずとも遠からざるべく、金満家として多額とするに足らず、一藝者

の爲めに是れ以上を棄つるもあれど、全く無財産と見做すべき者も營に數人ならず。選舉競争の爲めに一萬圓を調達するは容易の事ならず、四年間の歳費を抵當として尙足らず、無理算段の爲し得る限りを爲すを要し、解散にて打撃を感じるは如何に選舉人の心を得るよりも如何に運動費を作るべきかを憂ふるに在り。非幹部の紛擾も此點にて發せらるゝこと屢なり。幹部にて何程の金を支出するやを尋ね、相當の額ならざれば無能と呼ぶ。幹部の解散を避くるに務め、解散後の總選舉に苦心するも主として斯ることなり。中に全く金を心配せざるあるも、多數は頗る之を憂慮し、先だつものは路用の金の歎なきを得ず。謂はば皆な血の出づるが如き金にして、折角之を調達し何に使用

するかと言へば、選舉區に氣聲を張らんとするに過ぎず。三百八十一名に對して約一千名の候補者の出で、即ち一十萬圓を費すべき勘定にして、何處も不景氣を告ぐる時、斯かる金額を不生産的に費やすは、不經濟も甚だしとすべし。候補者及び聲援者は二人曳三人曳の車に乗り、演說會及び懇親會を開き、愈々白兵戰と爲りて、一票幾金宛にて買収し、一十萬圓は斯かる事に蕩盡し去る。之を生産的に使用せば、年に百萬を得べく、國家に抛てば優に國威發揚の一助とするに足る。然るに旗を立て、酒を飲み、空騒ぎに日を過し、候補者個々として財を損し、有用なる事業を起すの資財をして空しく雲散霧消するに終らしむる、世に不生産行爲の稀れならざれど斯く甚だしきは他に何物か

ある。有爲の人物の徒らに奔走するも損失なれば、多額の運動費の掛かるも損失の明瞭なるものなり。

されど不生産的と言へば不生産的に相違なく、實に空しく一十萬圓を費すに過ぎざるが、費すとは悉く消滅するを意味するに非ず。世には直接に觀るべき利益なくして間接に利益を生ずるもの往々之れ有り。總選舉も其の一例たるを失はず。運動費一十萬圓よりして何の利益を得るかと言へば、金錢上に全く言ふべき無く、皆な一たび散じて復た還らざるべきも、衆議院が國家に缺くべからざる以上、之を造るに一十萬圓を費すは決して高價ならず。議員らしき議員が少なきが爲めに高價を覺ゆるも、議員らしき議員の多くんば誰か之を高價なりと

すべき。詔に「其翼賛に依り與に俱に國家の進運を扶持せんことを望み」とあるに副はど、一千萬圓は廉に過ぎ、若し大に國家の進運を扶持せば、一億も廉とすべく、唯だ國家の進運を扶持するや否やを疑はざる能はざるを憾むるのみ。假りに議員らしからざる議員の多しとして高價に過ぐるを想定し、一千萬圓の行衛を尋ねれば、宴會費は必要なる飲食の外に飲食し、其れ丈け物質の消滅するものなるも、他は概ね右方より左方に遷るに止まる。候補者の費すは一部分自らの金、一部分他人の金にして、之を選擧運動に費さずんば、何等か類似のことに費し、或は閑居して不善をなし、妾宅を造り質骨董を買ひ、不生産的の甚だしきを極む。悉く人に貰ひ若しくは借りて運動する者は、二

三月間の融通にして、事餘りに單純なり。生産不生産を問ふ程の事もなし。多數が資産に乏しく、他人に補助を仰げば、他人への迷惑を慮りて然るべけれど、議員候補者に運動費を貢ぐ者は、固より友情よりするにせよ、又恰も相撲に廻しを贈るが如く、競争の勝負に特殊の興味を覚え、土俵の大なる丈け、興味も幾層倍か多し。相撲に廻しを贈るの怪むに足らずんば、選挙競争に力瘤を入るとの當然なるを見る。相撲好きは相撲に費さざれば更に劣れる事に費すべく、不生産的と言へば、遊廓の大屋高樓を何と解する。相撲芝居等が多少金錢の融通に利すべくんば、總選挙費一千萬圓は融通に利すること少なからず、或は不景氣に沈み勝ちなる世間に幾分の好刺戟を與へん。

太平樂者
流の科學
觀

○太平樂者流の科學觀

我國にては科學を修むるも特に得る所なく、之を修めざるも特に失ふ所なく、之を修むる者の少きのみならず、之を修むるを嘲笑するの風あり。科學的研究の猶ほ甚だ幼稚なる状態なるに、其の益を擧ぐるよりも、其の害を擧げ、曰く科學萬能説の弊なり、曰く科學萬能の時代は過ぎたりと、只管ら科學を罵りて甘心せんとす。科學萬能とは何の意義ぞ、空しく的制作りて之を射るは暫く置き、科學に代ふるに何物を以てせんとするか。更に優れるあれば、速かに代ふるの當然なれど、今日まで知らるゝ所にては、恰も老人の煩勞を厭て退隱するが如

——〔日本及日本人〕

社會の進
歩と道
徳の進
歩

く、唯だ難きを避けて易きに就くの有様ならずや。科學の方面を眺むれば、幾多荆棘の路を塞ぐあり、顧みて神祕の方面を視れば、大道坦坦たるが如し、必要に迫られずんば、誰か進んで荆棘を切り開くべき。永く必要の迫らずんば、勝手に太平樂を謠ひ得るも、世界の勢は之を許さず、戦争に於て、平和の戦争に於て、容赦なく太平樂者流を蹂躪し去る。——〔日本及日本人〕

○社會の進歩と道徳の進歩

社會の進歩の確實なる處には、徳行の人を見るに難からず。英國は惡風の少からざれど、政治家にして道徳家と見做すべきを出だすこと他に多く例なし、ピットにして今少しく華奢ならざらんか、大徳の人

國家と社會

として稱するを得たらん。グラッドストーンは種々批難すべき事あれど、遂に有徳の人たるを失はず、カムベル、バンナーマンの如きも同じく然り。伊國は衰運に陥り、道德の廢頽も著るしかりしが、建國隆興の時に際し、ガリバルヂーの如き、カヴールカヴールの如きあり、瑕疵の掩ふべくも無けれど、共に心事の高潔なるを以て推すべし。北米合衆國も、華盛頓を初め稱すべき人の現はれたるもの、惡風の加はれるに拘らず、其の駸々として進歩するの偶然ならず。日本も新たに長足の進歩を遂けたりとすべく、惡風の長ぜるとも、稱すべき人物を擧ぐるに窮せず、仁齋藤樹の如きの擧げ難きにせよ、多數の上に於て道德の進歩の争ふ可らざるものあり。之に反し衰運に就ける國は、時に幾人か

高德なるの輩出するも、多數は滔々相ひ率ゐて惡風に向ひ、復た救ふに由なからんとす、西班牙の如き、誠に悲むべき状態に在り。社會の盛衰は必ずしも富強を以て言ふを得ざれど、多様の點に於て進歩の明かなれば、道德も亦た進歩しつゝありとして誤らざらん。

—〔宇宙〕—

三照應

○三照應

裁判所の外に監獄といふ所あり、病院の内に地獄室といふ所あり、寺院の傍に地獄といふ所あり。地獄の沙汰も金次第、金ある者は監獄に入るとも、監獄にあらざるかの如く自由なるを得、而して病院に至りては、金の功德更に大なり、生死試験所といふ地獄室を免れて、親

切と鄭重とを以て満たされたる上等室に在りて治療するを得べし、寺院の領内に在る地獄に至りては、以て閻魔王に賄ふ可し、要するに裁判所に對する監獄、病院に對する病室、寺院に對する墓地、怖ろしき所なり。監獄に押丁あり、病院に看護婦あり、墓地に墓番あり、鬼とも見え佛とも見ゆ、金次第なりと謂ふ。囚徒の監獄室に在るや、猶ほ一室内を呻き廻るなり、病人の病室に在るや、纒に一蒲團上に呻き滾ぶなり、而して死人の墓地に向ふ、萬事休し、少しの動を作さず。善い哉、世の法律家なるものを視るに、ピンとして肩を以て風を斬らんと欲す、是れ一室内を呻き廻るを得る囚徒に對する態度として暗に照應す、而して夫の醫師なるものを視るに頗る落ち就きてツンとすまし

境遇の誤解

込まんとするものあり、是れ即ち一蒲團上に呻き滾ぶに過ぎざる病者に對する態度として暗に照應す、而して僧侶に至りてはヌラリとして抹香の如く、殆ど生氣無きが如し、是れ則ち萬事休せし死者に對する態度として暗に照應するなり。——〔小泡十種〕

○境遇の誤解

如何に人が境遇を異にして他人の事情を誤解するかは、事實に視る所、農夫は王侯の生活を誤解し、王侯は農夫の生活を誤解し、商人は雙方の生活を誤解す。書起きて農夫となり、夜眠りて夢に王侯と爲ると、書起きて王侯と爲り、夜眠りて夢に農夫と爲ると、大なる差異なしとの説あるが、王侯の夢みる農夫が眞の農夫ならずして、農夫の夢

みる王侯が眞の王侯ならざるを奈何にせん。農夫は曰ふ、我れ殿様と
ならば糞桶の輪を金製にすべしと、王侯は曰ふ我百姓とならば田畠を
公園にすべしと。——『日本及日本人』

好敵を得
るは難し

○好敵を得るは難し

良友を得るに難けれど、好敵手は更に得るに難し。

——『日本及日本人』

地の利か
不利か

○地の利か不利か

日本は確かに雄を東洋に稱し、一諾一否の重きを爲すにせよ、東洋
より離れて列強と國力を競ひ得るやは疑なきを得ず。陸軍の兵員は露
獨佛澳に劣り、海軍の噸數は英米獨佛に劣り、地の利を得ずんば、事

の困難なる無きに非ず。我が兵員噸數の劣りながら、東洋に強國の首
位を占むるは、東洋に國するが爲めに於て、全く地の利に基づけりと
すべけれど、利ある處害の伴ひ、地の害を被れるも少からず。富力に
於て他の強國に及ばざるは勿論、白耳義の如き和蘭の如きにも及ばざ
るは、一に東洋に國せしに出づ。若し北大西洋の東岸若くは西岸に國
したらんには、富力に於て指を屈せられ居るべく、貧國強兵の謗を招
くが如き、萬々之れ無からん。我が内地にも、日本海沿岸の富力の太
平洋沿岸に及ばざる、亦た富を致すの不便なるのみ。同じく一坪の地、
都府より遠ければ一厘の價なく、都府の中央に在れば、百圓の上に出
で、若し倫敦の如く、紐育の如く、都府の繁華なれば、殆ど測るべか

らざる高價に上る。日本が他の強國より劣れる軍備を以て雄視するを
 幸なりと爲さんか、富力に於て遙かに此に劣るを不幸なりと爲さざる
 を得ず。世界の戦史に特筆大書せらるゝを悦ぶに平行し、一將功成り
 て萬骨枯れ、國民の負擔の重きに堪へざるを悲むあり。世界を通じ交
 通の頻繁を加ふるに伴ひ、我國の富力の増進すべきも、同時に列強の
 軍艦及び運送船の東洋に輻湊し易くなるをも慮るべし。

—『日本及日本人』

○併合せらるる國と、併合する國

他に害を與へずして他より害を加へらるゝ國は、誠に氣の毒なる狀
 態なれど、斯かるは他を害せざる代り、他を益することも少く、自然界

併合せら
 るる國と
 併合する
 國

を活用するに加はりて最も功勞あるは、意力に富み、技能に秀で、他
 に強制せらるゝよりも他を強制するを擇ぶの民族なり。併合は形式に
 して、人類の幸福と關係の薄きも、併合する國民は併合せらるゝ國民
 に比し、人類の幸福を増進すること多し。併合せらるゝ國民の爲すが
 儘に任せば一年にて爲し得べきを十年にて爲し得ず、十年にて爲し
 得べきを百年にて爲し得ざるが如きあり。大閩の朝鮮に出兵してより
 三百二十年、其間半島は何等進歩を遂けたるあるか、我が内地は人口約
 二千萬、爾後の進歩の甚だしく著しからざるも、尙ほ歴に徴するに難
 からず。島帝國は半島を合はせ、列國に後れざるの進歩を遂ぐべく、
 半島の同胞も惡政惡習を免れ、均しく將來に希望を囑すべし。

—『日本及日本人』—

模倣の弊
は自ら模倣
者となせ
ざるにあ
り

○模倣の弊は自ら模倣者とせざるにあり

英國式紳士を以て居るは善し、英國式外文を以て任ずるは善し、されど日本と英國と國情を異にし、領土多き英國の外交を模倣するの、領土少なき日本に不適當なることあるを考ふべし。小店にて三越白木屋等に倣ふは誤れり、大店にても業務の宜しきを得ずんば、大丸の衰ふるが如し。日本帝國の外交の衝に當る者は、深く此邊の事を慮らざるべからず。己れが他の閣員より外交通なるを以て満足するの暇なく、他の閣員の外交不通なる丈け、愈よ自ら鞠躬盡力すべし。新聞の外交記事を檢閲し、民をして知らしめざるに汲々たるよりも、有る限

平和主義
と強國主義

りの智囊を絞り、絶大事變に處するの宜しきを得るに務めよ。故青木氏は獨國式外交を以て任じ、外交らしき外交をよくするもの、乃公を措いて他に人なしとの抱負あり、事毎に獨に則りしも、少くも外交に於て絶えて獨國式効果を收めしこと無し。自ら重きを以て居りし誤れるに非ず。日本と獨國との國情を異にするに氣附かざりしのみ。子自ら之を充分に知ると云ひしも、知るの足らざりしを掩ふべからず。模倣者の弊は概ね自ら模倣者とせざるよりす。——『日本及日本人』

○平和主義と強國主義

支那の國運は康熙乾隆と今日と著しき差違あるも、其の人民は孰れに幸福を感じるの多きや。羅馬帝國は強大なりしも、歐洲人は其の下

に在りしと、若干小國に分裂せる後と、孰れに幸福を感じるの多きや。生命財産の安全にして、不法に自由を束縛せらるゝ無きを以て満足せば、瑞西なり、和蘭なり、白耳義なり、強國の民に優るとも劣らず。されど強國に位置を占むる者より觀れば、斯かる國は國にして國ならず、國政に與かるも何等の愉快なかるべしとす。瑞なり、和なり、白なり、亦た國權を重んぜざるに非ず、眇たるモナコさへ、獨立を誇ることあり。如何に個人主義の行はるゝも、多數は國家の觀念を去ること能はず。個人の安全が大問題なるか、國家の安全が大問題なるか、強國たる者、又は強國たらんとする者は、固より後者に出でざるべからざるも、前者に傾く者あるを記憶すべし。平和主義の消長は強國主

義に反比例す。——『日本及日本人』

○老境に入れる國家

維新後利害を打算し、勢の不可なりとして屈從せしの屢となれど、尙ほ當年の意氣を重んじ、成敗を度外に置き、後人の志を繼ぐを望むありしに、歳を逐て次第に目前の利害に重きを置き、苟も權勢に與かるを得ば、何人と手を握るをも憚らず、苟も資産を増すを得ば、何人の前に叩頭するをも厭はざらんとす。果して眞に利害を打算し得たるか、將た敢て爲すの意氣を失ひ、奮闘して大に利するよりも、安樂にして少しの利益に甘んぜんとするか。外交に於ては、強きを避けて弱きを臨まんとし、曰く、米と争ふは不利益、曰く、露と争ふは不利

益、曰く、獨と争ふは不利益、曰く、英の感情を傷ふは不利益、唯だ
 不利益なきを欲して日を過すのみ。不利益とするに止まらば可なる
 も、延いて爲し得べきを爲し得べからずと斷定するに至りては、同胞
 を侮るの甚だしき者ならずや。沈思熟慮し、萬に一失なきを期するは、
 老成の稱すべきも、事實に於て老成よりも老境に入れるならずや。老
 人は過失の少きも、發展の見込なく、唯だ安穩に餘生を送らんとする
 のみ。個人としては隨意なれど、國家として此の有様なるは甚だ心細
 し。——〔日本及日本人〕

資本家と技術家

○資本家と技術家

資本家は技術家に對して我物顔に振舞ひ、技術の如何を觀ずして己

の意を迎ふるの如何を觀んとす。或は技術家の苦心慘澹たるを察せず、
 速かに實績を擧げざるを咎め、更迭の已むを得ざるを仄めかし、彼を
 して失望せしめ、絶望せしむ。資本家は眼中唯金にして、金あれば何
 事をも成し得、金なければ何事をも成し得ずとし、新發明新意匠に如
 何に能力を費すべきやを知らず。恰も黄金卵を産するの鳥を得、其腹
 を割かんとするが如し、鳥も死し、卵も得られず。

——〔日本及日本人〕

外務に人材無き理由

○外務に人材無き理由

外務に人物の乏しきは二個の事情よりす。一は外務の官吏が自家防
 禦の爲めに城廓を築き、他人の入込むを拒みしに出づ。嘗て尾崎氏が

勅參となり、唯だ室に閉ぢ籠るの外何事をも爲すを得ず、井上侯の後援ある都築男さへ繼兒扱にせられぬ。一は外交官の職務が辭禮を主にし、政治的手腕を伸ばすに適せずとて、男らしき抱負ある者が就職するを好まざりしに出づ。若干の例外を除き、外國語を操つるに巧みなるは、謂ゆるオッチョコチヨイの類にして、腹藝を演ずるに堪へず。膽略あり、辣腕ある者は、此等と俱にするを齒痒く覺ゆ。外務は有力者を迎へず、有力者は外務に入らず、外務の人に乏しき、怪むを要せず。——〔日本及日本人〕

詰込教育の害

○詰込教育の害

教育を受けたる者は、唯だ備を解かるよを氣遣ひ、官吏としては免

職と共に隠居し、實業家としては銀行會社を去ると共に隠居し、一生の事は人に依るの形あり。是れ悉く教育の弊ならず、常人の性質もあれど、教育が能動的の力を減ずるも決して之を増さざりしを打消す可らず。雜駁なる知識を詰込み得る丈け詰込むの害は頗る憂ふべし。

——〔日本及日本人〕

外交と民心の彈力

○外交と民心の彈力

民心は常に外交に關して充分の彈力なかるべからず。國辱を怒りて常規を逸するは、國辱を雲烟過眼するに優ること遠し。明治維新よりして今日の隆運を觀るに至れる、主として其彈力に出づ。一たび國辱を知るや、如何なる壓力にも抵抗し、之を反撥せずんば已まず。國民

大會の如き、實情を知らざるに出でしも、敵愾心の熾んならずして能く彼の如くなるべからず。——『日本及日本人』

示威運動

○示威運動

私立學校が聯合して官學の特典廢止を企て、示威運動を事とせしは、斯くせざれば政府の注意を惹かざるを以てなり。示威運動の流行するは、當局に具眼者の乏しきの致す所にして、若し早く是非得失を判別し、行ふべきを行はざり、絶えて斯かる事なかるべけれど、之を望むも益なしとありては、目的を達する爲めに間々示威運動を缺くを得ず。高官に庸材の多くんば、事は皆な示威運動を以て決せん。示威運動は多數の行列に限らず、少數の熱心の却て有效なることあり、正閭問題を

に際し、謗劣藤澤某の如きも一時桂首相を戰慄せしめにき。單に威嚇に止まるは、威嚇の目的に達せず、必ず問題と共に倒るゝの決心を要するが、獸身の行爲は何人にも望み難たし、少しく試みて成らざれば彼も一時此も一時と言ふが如き者多し。唯だ幾分にも己れの利害を離れ、國家又は社會の重大問題の爲めに盡力するは、其人の精神を向上し、併せて世間に益す。——『日本及日本人』

絶望より理想へ

○絶望より理想へ

若し従來の國家を以て頼むに足らずとし、如何なる國家の最も望ましきやを考ふれば、社會の未だ成立せざりし以前に遡り、更に合理的と認むる所に從て社會の成立を按出するの自然なるべし。歴史的に

研究するは、斯く研究し得る時代の事にして、未曾有の事變の起らんとする際、歴史的に研究する必要を知るも、之を實行し得べきに非ず。佛國革命は、終結後にこそ原因及び經過を尋ねるの難からざれ、其の將に起らんとせる時、誰か其の經過を豫想するを得たるや。十五世の時代、事實に徴して國政を討究し、匡救の計畫を定むるも、過去及び現在に疑を抱ける者に何の印象を與へざらん。改造よりも新造の擇ぶべくんば、若干の事實を根據とするよりは、合理的と認むる所に據りて想像を逞くする方、群衆心理を解する者とすべし。ペラミーの社會主義を説くや、百年後に執筆すと假定し、想像的社會を按出せり。理想は現在の事ならず、將來に實現すべしとするも可、過去に實現せし

ことありとするも可、ルソーが太古の社會を想像せしは、支那に唐虞三代を尊重せしに類せるも、現在に絶望し、新たに理想を求むるに於て妨げなし。——（『日本及日本人』）

○實を結ばざるを如何せん

従來の教育は總じて受動性を開發し、能動性の減するを顧みず、蓋を瓣にすれば、花の美を添ふるも、爲めに果實を結ばざるを如何にすべき。——（『日本及日本人』）

○生前の利達と身後の名

大學にて入學志望者の最も少きは理科、次いで文科にして、官吏専門の法科と大差あるは言ふを待たず、喰ひ外づれ無き醫科若くは工科

實を結ばざるを如何せん

生前の利達と身後の名

と比較するに足らず、中學教員養成所として高等師範と競争するの餘儀なき次第と爲り、處世上に最も不便なる者なり。幸に帝大教授たるも、法科出身者の局長と爲り次官と爲り大臣となるに比し、營に宮中席次の下るのみに非ず、社會の待遇も劣り、勅任にして勅任たらざるが如し。其の以下の學校に奉職するは尙更の事にして、二十年の勉勵を以てして昨年文官試験を通過せし者に呼び付けらるゝことあり。何の因業にやと思はるゝほど、誠に淺ましき體たらくにして、志望者の少きは順序の然るべき所なるが、生前に顯れずして死後に顯るゝこと、何方面の人が最も與かるべきや。理學者なり、文學者なり、教育者なり、強ち生前に顯れずと限らざるも、爵位の高きと雲泥の違ひなるが、

久くして後、爵位の高きは全く忘れられ、曾て輕蔑せられし者の大に顯はるゝに及ぶ。舊幕時代の關白や、閣老や、殆ど盡く忘れられ、儒者の徒の多く知らる。歐洲の闇黒時代に王侯將相の數ふるに堪へざれど、アルキメデスの如く、コルペニクスの如く知らるゝは、幾人かある。時代は違ひ、事情は違ひ、今の理科及び文科の出身者が果して他の學科出身者に優るに至るか甚だ疑はしきも、百年後の何狀なるやは直ちに現在を以て推すべからず。法科出身者に無氣力なるの少なからざれど、最も功名に熱中せるは、必ず歴史の數頁を割取せんと欲し、確かに之を割取るあるべきが、其の歴史は畢竟何物ぞ、幾代かの淘汰を経るや、後に残るは一時顯榮を誇れる輩ならずして、却て

貧しき生活を送れる者ならずや。歴山、該撒、奈破崙等の時代の再び來り、之と同様の行動を敢てし得れば兎も角、然らざる限り、富貴利達の及ぶ所知るべきのみ。曹孟徳が舳艫千里旌旗空を蔽ひしと、蘇東坡が客と舟を泛べしと、孰れが後人の記憶を喚び起すや。

—(「日本及日本人」)

早老的民
族

○早老的民
族

我が日本に老政治家と稱すべき者少し、武内宿禰の三百歳なるは、一の傳説に過ぎず。早く隱居の行はれ、天皇が上皇と爲り、法皇と爲らるゝが如く、臣民にも隱居の階級あり、若隱居といふあり。隱居して權力を争ひ、或は入道と爲りて戰場に出でしの少からざるが、何人

文明の代
價

が久しく劇務に堪ふるを證明したりしか。徳川家康は長壽にして成功せしと言はれ、實際然るに相違なきが、されば何歳にて歿せしかと云ふに、漸く七十五歳なりしに非ずや。信長の四十九、秀吉の六十三と違ふも、格別に長壽なりとするを得ず。七十五歳が政治的活動の最後なれば、民族として早老に屬せずや。——(「日本及日本人」)

○文明の代
價

文明は無代價ならず、東文明の西文明に譲るは代價を拂ふの少きのみ。時として敵國外患の爲に國亡ぶるも、敵國外患なきが爲に亡ぶること更に多し。戦争にて亡ぶるに非ず、遊惰安逸に流れ、退歩に傾きて進歩の速かなるに壓倒せらるゝなり。歐列國の名と敵國外患に苦

めるは、太平の民として不幸なると同時、進歩に於て幸福なる者にして、彼等の文明は汗と血とを以て買へりと謂ふべし。弱民族の面貌の單純なるに反し、強民族の眉間に一種憂愁の相あるを見、如何に後者が難關を経過し來れるかを知るに足る。彼れ強民族は艱難勞苦に人と爲れり。——〔日本及日本人〕

世界の最大牛後國

○世界の最大牛後國

支那の歴史は事大黨を以て興亡し、其の能く泰平を致すも事大の方針に於てし、戰亂を招き革命を餘儀なくせらるゝも事大の方針に於てし、會て契丹に苦められし復讐として女眞と結託し、而して更に女眞に苦められ、之が復讐として蒙古と結託し、而して更に蒙古に苦めら

地の利害と國力

○地の利害と國力

れ、國遂に亡びたり。能く自ら獨立する所以を考へ、小を以て大に對抗せし事實の甚だ少く、之を試みし者の少からざるも、能く成功し得たるは殆ど之れ無し。戰國時代、連衡は事大主義、合縱は反事大主義にして、合縱は遂に敗亡に歸せり。雞口の敗れ牛後の勝つと定まり、牛後を以て處世術とし、或は牛後にして雞口を装ふを以て最も聰明なりとす。雞口は強ち稱すべきに非ず、牛後の退讓に若かざることあれど、滔々相ひ率て牛後たらんとしては、進歩の甚だ覺束なきに非ずや。支那は牛後を以て安全を計り、世界の最大牛後國と爲れるに非ずや。

——〔日本及日本人〕

或る程度まで富國強兵並び行はれ、國富めば兵強く、兵強ければ國富む。日本は歐洲の強國に比して陸海軍の二者若くは其一に於て足らず、數字の上にて我は確かに劣勢なれど、我は目下他よりも少き軍備を以て優に對等たる他品を占む。彼と同數の兵員同數の軍艦なければ、彼と對等たるを得ざる時代には、我が富度も現在の如くならず、略は彼と對等なるべし。我は兵に於て地の利を受け、富に於て地の害を受く、交通機關の展進し、土地の利害を平均する曉、兵に於て地の利を失ふと共に、富に於て地の害を免れん。譬へば我は田舎の地主の如し、都會の地主と同面積の地を所有するも、地價甚だ廉にして、資産を競ふに足らざるが、都會同様に生活の程度を高むるの必要ある時、地價

は必ず騰貴し、坐ながら現在に幾倍するの富家と爲るべし。

——『日本及日本人』

中年者の社會と老少年者

○中年者の社會と老少年者

年齢に於て中年が社會の中堅を形づくるの當然にして、何處にても然らざる能はざるが、社會的活動の盛んなれば盛んなるほど、中年の黽勉するは言はずもがな、老人も働き、少壯者も働き、宛ら山も谷も樹木の鬱蒼たるが如し。我國は中年の黽勉するのみにて、老人は樂隠居を欲し、少壯者は人の力を假り、山巔に樹木ありて他は一面に雜草の繁れる有様なり。老少の中年と共に活動する社會は、中年のみ活動する社會よりも發動力の多くして、幾年かの後に勝利を得べき順序

民約論と
免疫

なり。——『日本及日本人』

○民約論と免疫

今日民約論を讀めば、其の何故に經典視せられしかを解するに苦み、或は書生の空想に驅られて能くし得る所なるを考ふるが、空想にせよ、妄想にせよ、其の絶大なる革命の經典と爲りしを打消すべからず。今日讀みて何の感動すべきを覺えず、而して百三十年前、讀み去り讀み來りて手の舞ひ足の踏むを知らず、爾後數十年間さる有様なりしこと、頗る奇異なる現象とすべきも、事は獨り此に限らず、人の種痘せずして必ず天然痘に罹る如き、同じく然り。人生れて必ず天然痘に罹るべき素質あり、罹れば美貌の變じて醜と爲り、或は畸形と爲り、甚だし

印度人の
冥想と温
帶地方

きは生命を失ひ、間々悲惨を極むることあり。社會は進歩の或る程度に於て必ず革命に罹るべく、立憲政治の實施を以て禍を免かるよのみ。今日民約論を一種の空想とするは、立憲政治にて免疫と爲りしが故にして、近く支那の如き、土耳其の如き、種痘せずして天然痘に罹りたり。——『日本及日本人』

○印度人の冥想と温帶地方

印度の氣候温熱にして山野に獨居し易き、進んで活動するは退いて沈思冥想するの氣樂なるに如かず。退いて沈思冥想するとして、天を戴き地を踏み、自然界より離るべくも無けれど、自らの心理状態を迎ふこと多く、經驗的知識に基づく格物に得る所あるよりも、致知及び誠

意正心に就て得る所あるべく、唯だ誠意正心は支那及び歐洲と違ひ、安心といふが如き意義を帶び、信じて惑はざるの點に於て同意義なりとす。自ら靜處して了得せるが爲め、修身齊家といふも、己れ自らの安心を主とし、之を有效にし、少くも之を妨げられざる立場にて他人に對し、治國平天下も、現に活動しつゝある國及び天下を措き、變動の少き廣義の人類の安全を計り、且つ之れを安心せしむべきを期す。温帶地方は春色惱人眠不得といふが如きありて、自發的動作の制し難く、目を閉ぢて冥想に耽るに適せざるも、活動に倦み靜處を求むる時、印度の冥想家に倣ふの興味多きを覺ゆ。——（『日本及日本人』）

○娛樂にも敵視す

娛樂にも敵視す

娛樂的競争も生存競争の質を帶ぶると共に、漸く相敵視するに傾く。

茶の湯の客四人が門を辭して出づるや、口々に當日の主人の拙なるを笑ひ、釜が云々、勺の持ち方が云々と罵り、或る邊にて二人づゝに別るゝや、互に他の二人の拙なること主人より甚しきを笑ひ、更に或る邊にて一人づゝに別るれば、各々從僕を顧みて云ふ、彼等皆巧者らしき事を言ふも、一向物にならず、下手さ加減に驚き入りたりと、謠曲天狗や、義太夫天狗や、浪花節天狗や、端歌天狗や、自ら天狗なる丈けに他の拙なるを笑ふの常なり。——（『日本及日本人』）

○復讐の動機

復讐の動機

同じく復讐なるも、己れ一身の損得よりすると、一層大なる者の爲

めにするとにて違ひ、己れ一身の損得より遠かるほど人に感動を與ふる所多し。

○日本の佛教に對する基督教の勢力

知識より言へば歐米にて進歩の最も遅れたものは基督教である、古代猶太の傳説を信ぜねばならぬとあつては、二人三脚で走るよりも尙窮屈である。とても當り前に進めぬ、進めずに遅れながら、今猶盛んであるのは日常の生活に伴つて居る爲である。平生知識を要せぬことは色々ある、大抵の事は別段深く考へたりせぬ、基督教は知識に於て中世相當であつて、日常の事が中世より引續いて來て居つては、中世のまゝ祈禱したりする、經文が眞理であるかないかを尋ねるを面倒と

する。世が文明になるに連れ、習慣が良くなり、基督教信徒の行ひも良くなり、未開地方と較べて如何にも品が高い、誠に較べ物にならぬ。併し習慣の違つた他國へ持込んで何の點が優るか、天草騒動の頃幻術の類に於て優つて居つたが、後にはさう云ふことをする譯にも往かぬ。神學は他の方面の知識の進むに伴ひ、絶えず改まつて來たものよ、習慣で信じて居るものに尤もと聞えても、信ぜずして既に或種類の知識に富んで居る者には頗る淺薄に聞える。知識は猶太よりも印度が進んで居つた、宗教關係の知識ならば佛教の一切經は大抵收めて居る、經文の幾分かを讀んだ者は、先刻承知といふ鹽梅である。信徒は固より斯る知識に關係なく、多くは愚夫愚婦であるが、此等は知識なくとも

既に鱗の頭をさへ信じて居る、基督教を説附けられても容易に従來の信仰を抛たうとはせぬ、難しいことを言はれよば分らぬのである。難しいことの分る方では佛教に相應の道理あることを知つて居る、バイブルに成る程と感ずることが少い、峩山は百合の花の喩に感心したが、感心すればさういふ様な事である。基督教は文明國の宗教であると、文明を媒介にして之を奉ずる者、建築及び組織に於て寺院よりも教會を好ましとし、趣味に於て之に傾くものを除き、佛教より基督教に移らうとするのは甚だ少い、爲に佛教は基督教に領分を蠶食せられたといふ程の事がない。——『明治思想小史』

○境遇と天才

才
境遇と天

學校教育は重に常人を主にし、特長ある者を尋常の鑄型に入れ、課程を履むに従ひ、次第に特長を減じ、即ち天才的分子を減すべき勘定なり。學校の束縛を受けずとも、他の束縛を受くべく、束縛を受くれば、其れだけ特長を減すべし。相撲は赤裸々の力を以て決する者、天賦の力量を伸ばすに適するが如きも、嘗て順序の嚴にして、雷電爲右衛門も初め採用を拒まれにき。今は成るべく情弊を絶たんとし、生れて雄偉の體力ある者は横綱となるべき修業を積むを得るが、若し政治家實業家科學家等の天才あるものにして、充分に特長を發揮し得んには、今よりも多く有力者を見出すを得べし。政治に、實業に、科學に、常陸山太刀山の如きの生まるとも、力士を引立つる如く此等を引立つ

る者なく、引立つるも相當の位置を得しめず、爲めに政治の天才ありて實業に就き、實業の天才ありて科學に就き、或は科學の天才ありて實業に就く。中年晩年に自ら悟り、或は人に知らるゝも、事既に遅し。固より大なる天才の常に出づべくも無く、百年に一人なるも、小なるは到る處に之れ有り。而して圓なる者、方なる者、齊しく教場に列し、齊しく業務に就き、圓なるは方に近似し、方なるは圓に近似し、相率るて尋常一様の群に入る。幸に境遇の適し、圓は愈々圓、方は愈々方ならんか、茲に始めて天才の顯はるゝを見んも、何處に境遇の適當なるあるか、漠として知るべからず。世の謂ゆる順境なる者必ずしも天才の境遇として適當ならず、謂ゆる逆境なるの却て順境なる事あり。

後世に傳はる人

天才を養成するは、横綱を養成するに較べて更に幾段か難し、何處より如何なる大人物の出づるか、唯偶然に現はれ來るを待つべきのみ。

—『日本及日本人』

○後世に傳はる人

後人が模範として欽慕し、生まれて彼の如くなれば足ると思ふ所は、歡樂を盡す者ならずして、却て其の反對に出づる者なり。大に富みて歡樂を盡す者は傳はらず、富みしか、富まざりしか、全く不問に附せられ、唯貧困を忍びて目的を達せし者が傳はる。

—『日本及日本人』

人生き語死す

○人生き語死す

板垣氏遭難の砌、板垣死すとも自由は死せずの語あり、氏若し當時起つこと能はざりしならば、斯語如何ばかり價値を増せる事ぞ、殆んど神聖と爲りしならん、氏の幸は斯語に取りて不幸なりしなり。今は人笑て云ふ、板垣死すとも自由の死せざるは當り前の事、誰れでも之を知る、餘計の事を言へるものかなと。

然れども是れ四十七士切腹せざれば價なきが如きのみ、ネルソンがトラファルガルの戦役に衆を勵ましと格言も、提督にして無事に生きながらへ得たらんには格言たるの價格を減すべかりしなり。板垣氏の言は實に今はの際の名言にてありしに相違なし。

——『小泡十種』

世の褒貶

○世の褒貶

世上舉て賞美するは殆ふし、久しからずして衰へん、世上舉て罵倒するは滅びず、久からずして興らん、一半賞美して一半罵倒する所、是れ稍と永續すべき毀譽の存する所——『小泡十種』

○帝力于我何有哉

支那人は幾十世紀の治亂興廢にて自然に了解する所あり、暴君汚吏の下を虐ぐるも、略ほ程度の定まり、人民の多數は平穩に過すべし。甚だしく虐ぐる者は、到底久しく位置を占むるに堪へず。たとへ露なり、獨なり、英なり、佛なり、敢て權力を握るも、特に虐ぐるを得ず、却て従来より生命財産を保護するとも、決して之を危くするが如き無

帝力于我何有哉

しとす。彼等は此點に於て樂觀者なり、帝力于我何有哉を信するや久し。彼等は國家の爲めに心を悩ますこと少し。

—(「日本及日本人」)

懷郷の情と愛國心

○懷郷の情と愛國心

郷を思ふの心は即ち國を愛する心の根源なり。今や封建割據、地を割して自ら守るの風、蕩然として地を掃ひ、北は樺太南半より南は臺灣に至るまで、全國悉く統一し相ひ和し、相ひ親み以て斯の邦土を守護せざるを得ざる時なれば徒らに一郷里一地方の利割に汲々し、爲めに他郡他縣をば冷かに疎外看過するが如きに至りては、痛く讓責せざる可らずと雖も、故山の風光に眷戀たるの心は、即ち國家を思ふ念

慮の要素たれば、必ずしも鼓勵すべきものに非ずとせず。ウォルター・スコット嘗て奈破崙を傳し評して曰く、彼の事業たる、宛も獅子の洞窟より躍出し、奮迅颯突、只だ獸類を追ひて直進し、以て我が洞窟を忘れたる者の如しと。是れ非なり、奈破崙嘗て曰ふ吾れ常にコルシカ島の事を思て樂めり、皇帝となりて巴里の大都に盛大を極めし時も、時ありて全く生地を思ひ以て他事を忘るること屢となりき、傍人或は吾が沈思默考するを見て、列國に對する雄大壯快なる策略を案排すと思ひしかど、吾が夢は偶々故山を繞りしのみと。彼が一舉一動、悉く佛國の爲めに盡くし熱心は、元と此處より湧出し來りたらんか。固より野心の如何に關しては、史家の論難一二にして足らざれど、初

めて中尉と爲りて戰場に馳せ向ひしより、人の城を屠りしこと幾何、人の國を滅せしこと幾何、而して蠻烟瘴雨、大西洋の一孤島に空しく絶代の雄骨を葬るに至るまで、刻々時々佛を思ひ、佛を愛するの心情は、曾て身を離るゝなかりき、其の愛國心の厚く且つ深き、蓋し比倫少し、愛國の情豈に他あらんや、只だ夫れ斯の如きのみ。

—『小泡十種』

蟲の善き主義主張

○蟲の善き主義主張

吉田松陰は小塚原に死するも、將た維新に遭遇して顯榮に列するも、言行の異なる無からんが、若し利達を計るが爲めに彼の如く唱へたりと認めらるれば、其の唱ふる所の大部分は無用の贅辯と爲るべし。斯

國難に際せる支那人と墨國人

くすれば斯くなるものと思ひつゝ己むに己まれぬ日本魂、禍を被るを知りて敢て信ずる所を變ぜざりしは、眇たる一匹夫を以て公侯爵より權威ある次第ならずや。松陰の主張を口眞似して元老に褒稱せらるゝ時、言ふ所の同一なるを以て松陰と志を同くすと考へんか、其の餘りに蟲の善きに驚かざるを得ず。—『日本及日本人』

○國難に際せる支那人と墨國人

支那人は天下を知りて國家を知らず、國家を思ふよりも自らの勢力を求むるに急なり。墨國は元と西班牙が土人の國土を侵略せし者、後ち母國との關係を絶ち、或は他國の管轄に歸して更に之より離れ、國家の一員として行動するよりは、自ら行動して國家を動かすに興味を

感ず。合衆國と併合するを欲せず、兵力を以て之を拒まんとするも、祖先の關係よりして獨立に熱心なるに非ず。自らの功名心を満たすには斯かる機會に於てするの最も便宜多きが爲めに於て、國家を強くするを得ずとも、或は一種の豪傑的行動を事とするを得ん。西班牙及び葡萄牙は歴史的の事實及び人物に乏からず、内憂外患並び到るも、必ずしも之を憂ひず、盤根錯節、利器を試むべきを思はん。支那人も、墨國人も他國人の憂ふるが如くならず、孰れも功名心の熾んなるは黨同伐異して勝利を得る所に無上の愉快を感じ、其他を問はず。

——〔日本及日本人〕

悲劇よりも喜劇

○悲劇よりも喜劇

支那に愛親覺羅の滅びしは、老木の枯れて僅かの風に倒れしと同じきが、僅かの風にせよ、風の力を認むべし。人民は事なきに倦み、何等か變の起るを望めり。日本との戦役ありとも、政府に於ける李鴻章一派の苦みしのみにて、人民は何程の苦痛を感じず。死傷者も彼の人口に於て曾に九牛の一毛ならず、政府の動搖を望むこと、悲劇を觀んとするが如く、寧ろ喜劇を觀んとするが如く、大富豪小富豪も其の意あり、事を起す者あれば、平素官吏に絞らるゝ慣例に於て之に資金を給するを厭はず。事の成就するらしきを見ては、尙吏ら之に援助を與へ、遂に滿清朝廷をして自ら逃避するの已むを得ざるに至らしめぬ。

——〔日本及日本人〕

○支那人の諦らめ

前年の戰役、我が國人は往々支那人の覺悟の善きに驚けり。戰場に於て甚だ怯懦、唯だ遁るゝに汲々たるも、萬々遁るべからざるを知ると共に、平然として死に就く。元と無益の煩悶を損とせるならん。其の覺悟に於て世に立ち、人生及び社會を觀察し、特に治亂を意に介する無し。譬へば猶ほ我が醜業婦の如し、彼の女は何處に渡るも己れを害する者なしとし生命財産の保護に於て國の境界なきを知る。往昔掠奪の自由なりし時代は兎も角、今は何國の何人も掠奪を恣にするを得ず、偶々之れ有れば、大なる疑問と爲る。彼等は斯かる時勢に成長し、深く考ふること無くして世界を家とするに想ひ及ぶ。支那人の國

亂に平然たるも之に同じ。時に悲憤慷慨し、或はボイコットを煽揚するあるも、是れ力の及ぶ限りの事にして、其の及ばざるの明かなる場合、全く與かり關せざるが如し、國亂れて不幸を感ずること無し。

—(「日本及日本人」)

○美醜と幸不幸

世の美人とするは藝妓女優の類にして、是れ必ずしも美人ならず、より美なる者の他に存在するは明かに知らるゝも、其の醜婦の範圍に入らざるのみならず、普通に美と呼ばれ、中に模範的美人を以て目せらるゝあり。然るに新たに出でし女優は姑く措き、藝妓は極少數を除き、數年間賑かに世を送れる後、漸次面白からぬ境遇に陥り、間々悲

慘を極むるにあらずや。富豪の妾と爲るは仲間の羨む所となるも、年
 老いて厄介視せられ、小過失にて放逐せらるゝの常にして、萬龍の一
 書生に拾はれしは寧ろ幸とすべし。大阪の八千代は今尚ほ疑問に屬し、
 未だ不幸とすべからざるも、美貌を以て生れずんば、彼の品性を以て
 して安樂に世を送りつゝあるべし。相應の家に生れて始末に終へぬ姿
 と爲れる小林孝子の如き、普通の容貌なりせば、無益なる煩悶を要せ
 ざるべし。下田歌子は女教育家として女子教育の最高壇に立ちつゝ常
 に多少の非難を伴ひ、知る者は之を教育家と稱するを憚る。彼は醜貌
 を以て生れざりしを損とすべきに非ずや。醜貌を以て生るれば、頓々
 拍子に立身せず、三位にまで登り得ざるも、老いて寂寥を感じず、益

益徳望を増し居るべし。奥村五百子は之に反し、天下の醜婦を以て知
 られながら、人其の醜婦たるの厭ふべきを覺えず、多く得難き女丈夫
 なるを追憶して已まず。五百子にして美貌ならんには、彼の如き行動
 を敢てし得ざるべく、彼は醜貌を以て自ら益し、醜貌を以て人を益し、
 併せて國家に貢獻せし所あるなり。斯く著しきの少きも、之に似て小
 なるは到る所に見るべく、女子の美貌は運命の分岐點として最も人の
 注意する所なるに拘らず、一生を通じて察すれば、幸なるは強ち幸な
 らず、不幸なるは強ち不幸ならず、恐らく平均して大差なきに庶から
 ん。——『日本及日本人』

○平和論と戦争

最も奇なるは平和の必要の注意を惹く時に大戦役の起る事にして、曩にプロツホが戦争不可能を論じ、露帝が平和會議を開催せし時、露國は益々東洋に戦備を修め、日本をして自國防禦の爲めに宣戦を布告するの已むを得ざるに至らしめぬ。而して壯大なる平和殿堂の竣成して間もなく、茲に歐洲を擧げて戦亂の蒼と爲るを見る。從來の平和は要するに武裝的平和にして、平和の語を使用するも武裝に重きを置き、年々之を増大するに傾き、平和は唯だ準備間なるを意味し、苟も準備の整へる曉、何時にても戦亂を捲き起さんとし、唯だ時機の熟せざるを憂ふるの狀あり。平和の聲の熾んなるを以て眞に平和時代の到來するが如く考ふれば、遂に強國の壓迫に従はざる能はず。

○四海兄弟主義と戦國の外交

四海兄弟主義なる人道は、不充分ながら白人間には行はるれど、異人種まで及ばず、嘗て及ばんとせしも、近來排斥運動の熾盛を加へ、往々残忍を極む。而も眞に異人種に對する毛嫌ひよりするかと觀れば、必ずしも然らず。寧ろ經濟問題よりせる者にして、米人が黒奴を包容し亞細亞人を排斥するが如き、要するに利害の打算に出づ。彼等は毛嫌を以て利害を忘るゝほど淡泊ならず、利ある處殆ど何物をも避けず、隨て優に外交的手腕を揮ふの餘地あるも、我國の外交は名目に囚はれ、何處よりも力づくに排斥さるゝ憂目を觀る。

國際の嫉妬

○國際の嫉妬

小國は小國と相嫉み、大國は大國と相嫉む。國際上の事、各々同程度の國と競争して已まず。諸威は瑞典と競争して分離し、巴爾幹半島の小國、相嫉みて聯合し、相嫉みて分離す、蝸牛角上の争鬪の絶えざると同時獅と虎と相争ひ、象と鯨と相競ふ。世界の政治史は大體に於て強國と強國との競争にして、強國中特に頭角を抽んずるあれば、他の諸強國聯合して之を挫ぐに務む。中にも英國は國民の生活の爲めに食料を海外より輸入し、之を輸入するが爲めに海上權を占め、苟も之を侵す者あれば、國を賭して争はざるべからず。常に鷓鴣の目鷹の目に

て警戒するは、嫉妬といへば甚だしき嫉妬、而し嫉妬せずんば自らの獨立を全くするを得ず。獨逸人は之を責めて曰ふ、「英は唯だ他國の隆盛を嫉む、佛國の隆盛なるや、他と聯合して之を攻め、露の隆盛なるや、佛と共に之を攻め、次で日本をして之を攻めしむ。今や我が獨帝國の隆盛を嫉み、百方妨碍を加ふ。世界は英國の世界に非ず、海上は列國の均しく航行すべきもの、英の海上權を我物顔するは、國際道德の何たるを解せざるものなり」と。獨逸人の口より國際道德の議論を聞くの如何にも滑稽に感ぜらるゝが、事實は彼の言ふが如きもの無きに非ず。英は實に海上に競争者の存在するを許さず、己れと對等ならんとするあれば、何等かの方法に於て之に打撃を加ふること、寧ろ國

是なりと謂ふべし。されど是れ英が第一等の位置を占め、世界視聽の中心たるが故に斯く認めらるゝものにして、分量こそ少なけれ、之に似たるは到る處に之れ有り。武陵桃源、全く他國と關係なければ已む、幾分にも他と關係あれば、多少之れと争ふの跡あり。嫉妬は個人道徳上最も忌むべきものゝ一に居るも、國際上の關係は殆ど全く嫉妬を以て成り立ち、焼餅ならば、焼いて黒焦と爲るも憚らざるの有様なり。——〔日本及日本人〕

戦亂の利害

○戦亂の利害

戦亂の結果は一概に謂ひ難く、大利を得る者と、大損を招く者と、其間幾多段階あるが、要するに個人の浮沈の甚だしきほど、國家社會

の上に変化を認めず。死傷者の不幸は言はずもがな、一家離散の已むを得ざるも少なからざるが、社會として死者を補充し、或は離散せし跡に商店を開き工場を興し、人の交代するのみにて、事業に廢絶なく、廢絶せるものも漸く回復し、衰頹せるものも漸く興隆するを見る。世には重病後に益々衰ふるもあれど、又た重病後に見違へるほど壯健と爲るあり。病氣ならずとも、長途の旅行にて身體の瘦せ、謂ゆるタビヤセし、家に歸りて幾日ならず頓に肥え太るを常例とす。國家も戰亂の爲めに衰亡し、巴比倫の全く消滅し、波蘭の全く國境を撤廢せしが如きあるも、奈翁一世時代に交戦せし國々が、總じて戦後に隆盛を致し、若干は長歩の進歩を遂げにき。戰勝國と戰敗國と大に違ひ、前者

の勃然として興隆するに反し、後者は創痍より癒ゆるの容易ならざるが、其の後者さへ本来壯健なる限り、必ず早晚一層健康の面貌を呈す。

——『日本及日本人』

文明と戦争

○文明と戦争

文明の進展と戦争の増加と、相比例するを唱ふるもの無く、相逆比例するを明言する者多く、或は之れを明言し之を事實に徴せんとし、而して事實の反證するを奈何ともする能はず。文明に平和の伴ひ、野蠻に戦争の伴ふこと、往々自明の理と考へらるるも、之を決する以前、謂ゆる文明及び野蠻の何を意味するかを確むるを要す。豫め文明時代に戦争を忌み野蠻時代に戦争を悦ぶと假定せば、自明の理を認むる外

後人の發憤する所

なきも、文明及び野蠻を以て現在の文明國及び野蠻國の如しとする限り、自明の理の自明の理ならず一種思想の錯誤なるを斷定すべし。

——『日本及日本人』

○後人の發憤する所

彼も人、我も人、我豈に彼の如くなるを得ざるべきと後人の發憤するは、富貴にして歡樂に耽る所にあらず、己の爲すべきを信じ、倒れて已まんとする所に在り。——『日本及日本人』

○人の超俗欲

詩人は鳥の籠より出づる能はず、空しく外界を歎美するに喩ふべく、古今東西の差別なしとすべきが、詩人ならざる者も外界を歎美せずし

人の超俗欲

て籠の破れ目より脱せんとする狀あり。社會の變遷し、舊制裁の弛みて新制裁の成らざる間、本能の向ふが儘に行動して憚らず。若し多少理論を組み立つるの能力あれば、依りて己れの嗜好及び行爲を辨解し、世俗に囚はれたる者と同日に語るべからずとす。束縛に屈するは不愉快、束縛を排斥するは愉快、我が力にて重大なる物を動かすは、其れ丈け愉快を感すべし。小兒は大人の下駄をはきて喜び、自ら大人と同等に爲れりと考ふ。幾代も人が服従せし壓抑に對し、己れ能く反抗し得たりとするは、自らの尋常ならざるを認め、頻りに之を人に吹聴して喜ぶ。特に世俗に背かざるも、背くべき事を明言し、而して幾許か人に興がらるれば、明言するのみにて不可抗の習慣に反抗し得たり

と心得、普通世間にて憚るが如きを口外す。壓力に屈服して何の不平なきは其れ迄なるが、多くは何程か壓力に反抗せんとし、唯だ力の足らずして従ふのみにて、力あれば何處までも反抗を試み、動もすれば己れの存在に必要な者をも撤廢せんとす。鳥は空中に飛翔して空氣の壓力を厭ひ、魚は水中に遊ぎて水の壓力を厭ひ、裏屋の鼻は井手端會議に不平を漏らし、良家の子は不足なく家に成長して家を厭ひ、良家の妻は甘く夫に保護されてノラに同情を表す。人氣を營業とする者は、絶えず目先きを替ふるを要し、或る刺戟を與ふる後、更に一層強き刺戟を求めざるべからず、松明に代ふるに蠟燭を以てし、蠟燭に代ふるに石油を以てし、石油に代ふるに電氣を以てし、電氣も装置の變

改に務むる所あり。強きを得れば強きが上にも強くすべく、人爲的なるに倦めば、自然的なるの快を覺え、自然的なるに飽けば、更に不自然的なるに移る。勸善懲惡にて目出度く終はるの多くしては、其の實際に違ふを咎め、斯く窮屈にせざるを氣輕く感じ、頻りに自然的なるを求む。而も自然的なりとて花は紅柳は綠といふのみも面白からず、晴雨よりも雷電の興味多く、日月よりも彗星の興味多く、有りの儘を告白するに止めず、罪惡の力を誇張してジゴマの如きを按出す。之を見聞して喜ぶは暫くにも習慣より離れんとする者にして、更に知識の進めるは、現代の社會を改造すべきを考へ、力の及ばざるも、せめて一部分の變改を企つ。ワグネルなり、ユゴーなり、イブセンなり、

西洋の美食

シヨーなり、普通の習慣に違へるを發表し、初め壓迫されて後ち漸く歡待せらるゝは、習慣に満足せざる者の多きに出で、即ち人は超俗欲の潛み、機會を得て發せんとするなり。——(日本及日本人)

○西洋の美食

ヘロドトスに據れば、波斯人の貴きは牛若くは馬若くは駱駝を丸炙りにし、賤きは羊を丸炙りにすとありて、正しく支那の大牢及び小牢に相當す。希臘のアルケストラトスは料理を以て名ありしこと齊の易牙の如く、而して其の廣く知られしは一般に料理の重んぜられしに出づ。時代は數百年も後なれど、羅馬のアピキウスは美食を好み、料理に苦心し、實に七百萬圓を費やし、剩す所七十萬圓と知るや、粗食して

生くるは死するに若かずとて自殺せし程にて、如何に世間に料理を重んぜしあるかを察するに足る。斯く料理を重んずるは料理の進みしが故にして、愈々進みて愈々贅澤と爲り、遂に孔雀を供へざれば耻辱とし、甚だしきは孔雀の舌及び腦のみを供ふるに至れり。魚をも珍重し、一尾六斤なるを八百圓に買ひし傳へらるゝが、之に應じて鳥獸の珍味を求め、到らざる無し。佛國の料理の進歩せしは、伊國より料理法を得たりし後の事にして、徒らに孔雀の肉を供ふるが如きこと無けれど、珍味を供ふるに務むるに於て更に優る所あり。孔雀は後世多く飼養し、羅馬よりも肉を食し易く、且つ美味なるに相違なけれど、他に種々の美味の知られ、其肉よりも其毛を賞するの有利なるを認めたり。

蛙や、蝸牛や、未開人も食ひ、開化人も食ふが、開化人の食ふは必ずしも未開時代の遺習ならず、有らゆる美味を嘗めし後、何かな珍味もがなと尋ねし餘りに出でし無しとせず。蝸牛が貧賤の膳より富貴の膳に上るを以ても推すべし。——『日本及日本人』

○大陸に避暑旅行せよ

盛夏の候、官吏政客若しくは實業家は温泉又は海水浴に滞在するを例と爲すが、家族を作て都門の炎塵を避くるには斯くの如きも亦已み難き所なれど、單身旅行を試むを得ば、寧ろ一層遠隔の地に行遊するを可とす、即ち北海の山野を經由して千島若くは樺太に渡るも一興なるべく、或は途を浦鹽斯德に採りて黑龍江に入るも一興なるべく、更

大陸に避暑旅行せよ

に支那に遊びて風物を研究するも亦た一興なるべし、支那の沿岸に避暑すべき勝地至て尠きも、楊子江を溯りて巴蜀に周遊し謂ゆる千里江陵一日還の快事を實驗するも豈に妙ならずや。マクス・ミューラーは英人が休暇に乗じて瑞西の山水を賞し伊太利の温光を趁ふ者ただ衆きを觀、寧ろ一層遠く君士坦丁に行遊するの更に興多く益大なることを勸告したり。我國中流以上の徒、須らく休暇に乗じて大陸に遊び以て觀光的旅行を試むべし。是れ己れ一身をのみ裨益するに止まらず。

——『小泡十種』

○趣味にのみ専らなるもの

趣味にのみ専らなるもの

唯だ趣味を旨とせば、早く隱居じみ、若隱居と爲り、浮世を茶にする

古酒

に傾く。——『日本及日本人』

○古酒

千七百七十八年一船シエルド河口に難破す、千八百十四年引上げられしが、内に葡萄酒の函あるを發見し、之れが購買に就て激烈の競争を生じ、路易十八世特に使を遣はして之を求むるに至りぬ。その一部アントエルプなる佛國領事の手に入り、それよりして幾分かはラグズ公爵夫人の許に移りしに、千八百五十八年金滿家のロスチャイルドは公爵夫人の分四十四壘をば金の量目を以て買得たり、即ち葡萄酒一匁に付金一匁といふ割合にて買へるなり、而も此際尙ほベロン等の競争を免れざりき、以て西人の古酒を貴ぶを看るべし。然るに古酒を貴ぶ

は一種の迷誤に出づるもの、眞に美味の爲めにするに非ず、且つ酒は貯藏宜しきが爲め比較的に永く安全なるを得べきも、從來の貯藏法にては大約の期限は知れ切りたり、普通に稱するが如く久しきを保ち得る者にあらず、數百年腐敗せずなどは嘘の皮、斯る場合には何處にか詐偽の存すべく、又實に存したるなり。——『日本及日本人』

○概括的判斷

知識の淺きほど、概括して斷定するに傾く。凡そ世間は云々、凡そ日本人は云々など、概括して平然たり。直覺的なるの必ずしも悪しからざれど、往々己れの弱點を自白するに終る。凡そ日本人は輕佻なりといふは、己れの輕佻なる眼鏡を以て總てを輕佻と觀るに非ずや。凡

概括的判斷

そ日本人は模倣癖ありといふは、己れの模倣癖ある眼鏡を以て總てを模倣癖ありと觀るに非ずや、凡そといへば自らを包括する筈、同胞を侮蔑すると同時、自らを侮蔑する順序なるが、己れを以て人を律するの不可なるにも考へ及ばざるべからず。凡そ世界は云々なりと斷定するに至りては、更に幾層か深く注意すべし。——『日本及日本人』

○科學は名刀に似たり

正宗の刀は、妙手の揮へば鐵を斷つべく、小兒の弄へば、自ら傷つくに終はる。村正の刀に至りては、之を佩ぶる者、人を傷つけざれば自ら傷つくべしと傳へらる。科學も之に類し、善意に之を使用すれば世に福し、惡意に之を使用すれば世に禍し、福せるの多くして、禍せ

科學は名刀に似たり

るも少からず。其の禍せるより考へ、科學の利害相ひ償はざるを斷定せるあり、ルソーは附會して非文明を説き、トルストイは、眞意より非文明を説き、他にも多少非文明を説けるあり。悪人が精良の器械を使用すれば、善人は同等以上の器械を使用し、之に對抗すべきに、悪人が精良の器械を以て禍を大にするが故に、器械の進歩を呪はんとするなど、誤れるの甚だ明白なるも、逸樂を欲する者は、勞せずして安穩ならんとし、罪を器械に歸し、或は文明に歸し、之に反對せる行動を賞賛す。——『日本及日本人』

演劇と人事の大劇

○演劇と人事の大劇

演劇は經營者其人を得、俳優其人を得、脚本其宜しきを得るを要す。

其一を缺けば不可なり。獨り演劇ならず、人事の大劇（グレート・ドラマ・オヴ・ヒュマン・アツフェヤス）に於て又然り。康熙帝の對聯に日月燈、江海油、風雷鼓板、天地間一大戲場、堯舜旦、湯武末、莽操丑淨、古今來許多脚色とあり。此の一大戲場が三者の如何にて結果に著るしき差違を生ずるは屢々見る所、但だ演劇に比して人事は遙かに複雑、一方は數十人、多くして數百人、他の一方は之に百倍し千倍し萬倍し、三者の性質及び相互の關係も同日に語り難し。俳優は眼前に現はるよも、何處に經營者あるや、何を以て脚本とするやの判明せざる事あり。演劇も經營者の區々にして、帝劇なり、松竹なり、某々有志團體なり、立場の全く異なるあるが、何人が經營の主任なるか、

獨裁的なるか、合議的なるか、之を言ふを得ん。實社會は斯く簡單に規則立たず、或る場合に經營者の明白に現はれず、或る場合に經營者と思はるゝの經營者ならずして、意外の邊に眞の經營者の控へ、或る場合に、唯だ徒らに多數の動搖し、混沌として名狀すべからず。されど何等か經營者あるに相違なく、其經營の如何にて俳優及び脚本も或は引立ち、或は引立たず、而も如何なる經營者ありとて、優良なる俳優の出でずんば、觀るに値する無く、又た優良なる脚本の存せずんば、折角の俳優も妙技を發揮するにへず。觀客の趣味如何も問題なれど、主要なるは彼の三者なり。——〔日本及日本人〕

○自ら知らざる者

自ら知らざる者

人は先進豪傑の短所に倣ひ易く、英雄色を好むといひ、英雄人を欺くといふが如きある爲め、弊を被れること少からず。モルトケは議會に軍備擴張を主張し、而して容れられざるや、如何なる反對あるも差支なしと言ひ放てり。モルトケを尊崇する者は、其の斯かる態度を模倣し、反對に屈せざるを以て勇なりとす。されどモルトケに稱すべきは參謀總長たるにあり、對議會策にあらず。ビスマルクも對議會策に拙、モルトケは固よりの事、若し對議會策に長ずれば、嘗に鬼に金棒のみならず。鬼ならずして好んで金棒を捨つるは己れ自らを知らざる者なり。——〔日本及日本人〕

○人と名

人と名

人は生きて稱せらるゝあり、死して稱せらるゝあり。有名にして稱すべきあり、無名にして稱すべきあり、有名にして稱すべからざるあり、一時盛名の赫々たるも、去る者は日に疎し、花火線香の如きは、更に早く忘れらる。忘れらるゝは必ずしも人物の劣れるに非ざれど、忘れらるゝは事實なり。或は忘れられたる者にして、後ち漸く知られ、遂に大に知らるゝあり。——『日本及日本人』

○名譽は猶紙幣の如し

本分なり、職分なり、義務なり、金貨を指せるものにして、名譽は之に割合はして發行せる紙幣なり。證券なり、手形なり、普通に紙幣を使用し、以て寶とするも、實は紙其物の寶なるに非ず、之を寶とす

名譽は猶紙幣の如し

るは、別に相當の理由あるなり。平時之を意識せずとも、必ずこれを意識する場合あり。世に紙幣を貨幣とするが如く、一般に名の爲めに努力するも、名譽は名譽として價值あるに非ず。名譽の價值なきを言ふは、紙幣の價值なきを言ふに異ならず。紙は割いて反古にすべく、少しの價值なけれど、持參する者は表記の金貨を與ふとありては、携帶し易き丈けにても金貨より便利なり。名譽の果敢なきを考へ來れば、生前一杯の酒に若かずと爲し得べきが、名譽ある所必ず人の本分ありとせば、名譽の如何を以て去就するより便利なるなし。されど畢竟するに便利上の事にして名譽が本來の價值あるに非ず。政府の危き場合、紙幣が下落して無價值となり、金貨を以て取引すると同じく、名

譽の頼むに足らず、唯だ本分の爲めに努力することあり。源爲朝が吾は鎮西八郎にて足ると言へりしは、當時の官職が不換紙幣同様にて、吾に藏人が無價値ならず、關白太政大臣さへ難有味なかりしなり。

——〔日本及日本人〕

○外交官としての星亨

外交官としての星亨

故星亨氏は外務に飛入りして駐米公使と爲り、職務上に何の功なく、米に誂へし軍艦より口錢を取り、歸りて大隈内閣を破壊し、飛び入り外交官の惡例を遺しよが、若し惡に強きが善に強くんば彼れ星が愈愈外交に功を立てんと思ふ時、聊か見るに足るありとすべかりしに非ずや。彼れ外交官として缺點あるも、全く缺點なきは他に一人も之れ

紳士に上下あり

無し。寧ろ藥となり毒となるを求めんか、將た藥とも毒ともならざるを求めんか、考ふべきは此に在り。——〔日本及日本人〕

○紳士に上下あり

其人自らが紳士なるか、其人の外貌が紳士なるかは、紳士の價値を決するに最も多く與かる所あり。能力ある者は、盜賊に遇ふも、火災に罹ふも、社會上の位置に何の變化ある無し。能力なき者は、貯金せし銀行の破産せるが爲め、見る影もなき姿と爲ることあり。他に優りて服裝を美にし、家屋を大にせしも、一たび變に逢ひ、呆然爲すべきを知らざるは其人の紳士なるに非ずして、服裝住宅にて紳士たりしなり。往昔波斯に一賢人あり、粗服して宴席に入る、人皆な輕蔑して

側かたはらに列れつせしむるを拒こはむ。彼かれ敢あへて争あらそはず、家いへに歸かへり、美服盛装びふくせいさうして再またび席せきに入るに、人皆ひとみなな恭うやうやしく席せきを讓ゆづる。彼かれ之これを視み、徐おもむろに美服びふくを脱ぬいで椅子いすに置おき、其前そのまへに酒膳しゆぜんを供たなへて曰いふ、之これを飲のみ、之これを食くへ、列席れつせきの紳士しんしは服装ふくさうに敬意けいいを表へうす、汝服装なんぢふくさう、飲食いんじよくせよと。傳説でんせつの遺のこれるは斯かく諷刺ふうしすべき事ことの世間せけんに斷たえざるが爲ためにして、紳士しんしの裏面りめんに立たち入いれば、内空虛うちくうきよにして外美觀そびくわんなるの少すくなからず。人ひとの實質じつしつは病氣びやうきを除のいて甚はなだしく變化へんくわせず、有爲轉變うゐてんぺんといふは、外觀ぐわいくわんに安やすんじ、外觀ぐわいくわんを恃たのみ、偶然性ぐゐぜんせいの常つねに必然性ひつぜんせいなるを思おもふに由來ゆらいすること多おほし。郷がうに入りて郷がうに従したがひ、羅馬ろまに入りて羅馬ろまに従したがふべきも、相當きうたうの式しきを守まもれば、以もつて紳士しんしたるに足たるかといふに、謂いはゆる紳士しんしたるは則すなはち之これれ有あり、未いまだ紳

日本の紳士と英國の紳士との相違

紳士しんしの上級じやうきふなる者ものならず。苟いやしくも常識じやうしきを備そなふる者もの、紳士風しんしふうを装まもふに於おいて何なんの難かたきを覺おぼえざるが、何事なにことにも階級かいきふあり、同じく官吏くわんりに判任はんにん奏任そうにん勅任ちくにん親任しんにんあり。高帽シルクハットとフロックと革かわの手袋てぶくろとあれば、世界せかいの何地いづちに往ゆくも、少すくなくも或ある席せきに於おける紳士しんしなれど、紳士しんしとして猶なほ大おほに爲なすべき事ことあるを思おもはざるべからず。如何いかに世よに益えきするも、相當きうたうの式しきを守まもらざれば、社交外しゃかうぐわいに立たたざるを得えざるが、紳士しんしは多少世たせうよに益えきする所ところあるべき者ものとして、少すこしく世よに益えきするよりは多おほく世よに益えきする丈だけ、紳士しんしとして向上かうじやうせりとすべし。——『日本及日本人』

○日本の紳士と英國のセントルメン

上流じやうりゆうに於おいて英國えいこくのセントルメンセントルメンを標準へんじゆんとせば、他たの多おほくが之これを意識いしき

すると否とを問はず、自然に標準ありとして差支なく、英國に皇帝をゼントルメンとするが如く、我國に天皇陛下を紳士と稱し奉るの畏れ多き次第なるも、政治に關係ある者、之に准すべき者、實業家の幅利きなる者、皆な紳士にして、職業に於て日英に格別の差別なし。而もゼントルメンに比して、紳士の頗る貧なるあり、頗る知識の乏しきあり、頗る徳義心の薄きあり、其の缺點よりせば、ゼントルメンに當るに足らず。ゼントルメンとて、甚だ如何はしきあれど、多數を平均して比較的程度の高きを見る。日本の紳士に貧なるあるは、社會全體に富まざるにも因るが、封建を去ること遠からず、金錢は商家の事、士たる者の與からざる所と定まり、西郷南洲が我家遺法人知否、不爲

兒孫買美田といへりし程なるに基づく。隨て貧にして智あるあり、徳あるあり、富みて智なきあり、徳なきあり、其の調和せざること往々外人の奇怪に感ずる所なり。されど英國にても、世襲的に富貴なるは、概ね行狀の修まらず、放縱を極むるも珍らしからず。上流と下流とは別、唯だ中流を見よ、中流は國家の脊骨なりといふも是よりの事にして、營養の過ぎたると營養の足らざるとの病身なるが如く、餘りに富めるは、社會よりして病的と認むるの當れり。衣食足りて禮節を知るも、衣食餘りて禮節を亂る。豪奢に流るゝの餘裕なく、さりとして衣食に追はるゝことなく、力に應じて社會に活動するを最も愉快とする者は、身に規律あり、而して不善を爲さず。我が紳士は情狀混沌に

して、何の部分の最も稱すべきやを言ひ難きも、英國と同じく中流とすべく、唯だ彼と違ひ、下流の幾分かを含ましむべし。

——『日本及日本人』

大政事家の快事

○大政家の快事

大に富み大に驕らずんば高き位置を占むるの效能なしと疑ふあるが、斯かる事に歡樂を求むるの徒は政界に飛ぶとも僅かに蝙蝠の飛ぶが如し。大政治家の愉快は我が施設の效力の顯はれ、幾分にては國家社會の進善せんとするを見るに在り。酒池肉林も唯だ客を饗應するが爲めにし、自ら何程の愉快も感ぜず。——『日本及日本人』

○外交官たるの資格

外交官たるの資格

普通の辭禮は常識を以て解すべし、赴任國の言語を練つるを得ずとて、譯官を介すれば足る。日本に駐在する外國の大使公使にして日本語に巧みなるは幾人ぞ。我が外國駐在の大使公使も自ら駐在國語に通じつと、譯官を介すること稀ならず。外交官として最も能力を以て推されし陸奥伯は外國語に巧みなりし者ならず、小村侯は英語英文に堪能なりしも、ボーツマス談判は佛語の譯官を以てせり。外交官選擇の標準は外國語を練つるの巧拙如何を以てせず。複雑なる談判に堪ふるや否やを以てすべし。

○才能と依頼心

才能と依頼心

依頼して事を爲すは、獨立して爲すより易し。されど寒しとて衣を

重ね、歩行の懶しとて車に乗るは普通の状態にせよ、多く衣を重ね、多く車に乗れば、身體の抵抗力を減じ、一旦危険を冒すの已むを得ざらんか、疾病に罹りて斃るゝを免れず。依頼して事を爲すに慣るれば、興奮を弱くし、忍耐を弱くし、僅かの事をも自らするを厭ふ。當初才能に擢でし者も、其の才能を使用せざれば、萎靡して伸びず。依頼して事を爲せば需用せらるゝ丈け才能を使用し、需用せられざる才能を使用せず、使用せずして伸ぶること無し。青年期に才能の潑刺なりしも、其の才能を用るざるが爲め、擢でし才能も早く止まり、後ち殆ど全く消滅するあり。學校に俊才視せられし者が後に觀るべきなき、要するに斯かる事情よりせずや。——『日本及日本人』

國の貴き所以

○國の貴き所以

安んじて生活し得るも、唯だ安んじて生活するに止まるは、多少氣力ある者の堪ふる所ならず。文明の進むは氣力ある者の突進して人の未だ爲さざる所を爲すに起因すること多し。白色にして瑕なき大理石の巍々たる山嶽を成すも、其の儘に爲し置けば一の山嶽たるのみ、フキチアス出で、ミケランゼロ出づるや、吵たる一小塊も尙ほ人の美感を促し、之をして讚歎して已まざらしむ。蒸々たる幾億の民、徒らに生活せば、大理石の山嶽に異ならず、奮て起つ者あり、何等か前よりも程度を高くむる所あらば、其の徒らに存在するに非ざるを明かにせん。事功に大小あるも、多少さる事功あるは、皆な稱揚すべし。國は

世に報い
らるるも
可報い
らざるも
し不可
なり

國家と社會

三六〇

木あるを以て貴からず、人あるを以て貴からず、直接若くは間接に人類の文明に貢献する所あるを以て貴し。——（『日本及日本人』）

○世に報いらるゝも可、報いられざるも不可

なし

検定試験にて中學教員たる者は、帝大高師等の出身者に對し肩幅の狭きを覺えんも、法科文科にて修むる所の如き、獨學にて辨ずるを得べし、頻りに圖書を購讀し又は借覽せば、ノートに追はれて卒業せる者に優ることあり。中學に教鞭を執りつゝ學位論文を草すること、亦た必ずしも難からず、審査を受くるを不見識とし、或は學位を受くるを欲せざれば、單に著書として發表すべし。相當の成績なれば、博士

會に紹介するあるべく、全く棄て置かるゝとも、學位なくして其れ以上の學力を備ふるを自覺すること、愉快ならずとせず。教育家として人に感化を及ぼすは、中學校長、或は大學總長に優るを得ん、若し多年教員生徒を指導するの宜しくは、文部省の選奨せずとも或る方面に於て何等か報ゆる所あるべし。小學校長は奏任たるを最大名譽とし、偶々成績を認められて奏任と爲れば、茲に相場の定まり、文官奏任六千人の末班として死せざる能はざる如くなるが、若し眞に成績の見るべきあらんか、後人に感謝せらるゝこと、勅任以上、或は親任以上なるべし。妄りにペスタロッチ、フレイベル等を望むべからざるも、其の聲名の大政治家に譲らざるに徴し、如何なる處にも充分に人事を

國家と社會

三六一

盡くし得るを察すべし。誇大狂として、實力なくして實力ありとし、誠に度すべからざるあるも、常識を失はざる限り、實力を以て虚勢に勝つの大愉快なるを感じ、人も其の大愉快なるを感じるを當然とす。世に報いらるゝも可、報いられざるも不可なく、唯だ人衆き者は天に勝ち、天定まりて亦た人に勝つといふの、大體に於て當れるを認むべし。

——『日本及日本人』

年齢と位置

○年齢と位置

老耄すれば活動するを得ず、活動するも利の害を償はざるを以て隠居せしむべし。少壯者の力なきは、事を任すに足らず、事を任すは小兒に名刀を與ふるが如し、自ら傷つけ人を傷つくるに終はる。能を能

とし、不能を不能とし、強て不能を敢てせんことを望むべからざれど、能を不能として之を發揮するを許さざるは天物を暴殄するに均し。自ら老耄なりとし、自ら弱輩にして事に堪へずとするの卑屈なると同様、單に年齢の故を以て位置を定めんとするの不心得なるは言ふを俟たず。——『日本及日本人』

○二種の純潔分子

世間に腐敗の跡の絶えざるも、國民は決して甚だしく腐敗せず、甚だしきこと支那の如くならざればこそ、國運の發展を望むべく、又た實に發展を見るを得るなれ。正義の士と仰山に言ふは如何がなれど、兎にかく不正を憎むの氣風は確かに儼存しつゝあり。短所を短所とし、

二種の純潔分子

全く自身の利害を離れて腐敗を攻撃する者、即ち純潔なる心を以てする者の少からざるを認むべし。唯だ純潔なる分子に二種あり。一は固く自ら信じ、飽くまで誘惑に抵抗する者、一は未だ誘惑されずして汚穢に染まざる者、是れなり。純潔なるの最も稱すべきは、屢と誘惑されて常に之を排斥するに在り。故乃木大將の如き、富まんと欲せば如何様にも富むを得たるべく、生來貧相とするの大なる誤謬にして、其の富み得べくして富まず、一切御用商人を寄せ付けざる所に純潔の純潔たるを見る。腐敗を責むる者に何程か斯く純潔なるあり、大將の如くならずとも、之に雁行すべきあり。而も賄賂を得るの能力なくして之を得ざるもあり、さる能力は無きに若かざれど、惡に強きは善にも

強しとせば、能力なくして腐敗せざるは、能力ありて腐敗せざるほど頼もしからず。されど腐敗せざる間、純潔なるに相違なし。

——『日本及日本人』

新進の米國

○新進の米國
米國は劇場として緞帳の姿なれど、歐洲が檜舞臺の種々の格式に束縛せらるゝに反し、俳優各自の技倆を發揮し、間と滑稽に亘るにせよ、動作の活潑なる、観客をして頗る感興を催さしめ、其の位置は俳優の勢を得て新俳優と爲れるが如し。——『日本及日本人』

○宇宙の目的に關する樂觀

一般には愉快もあり、不愉快もあり、充分に休息し活氣の回復する

宇宙の目的に關する樂觀

時は爽快を覺え、漸く疲勞するに隨ひ僅かの事にも苦痛を感ず。將た同一の湖にして、淫雨霏に、陰風怒號するに方り、感極まりて悲み、春和景明、一碧萬頃、漁歌互に答ふるに方り、心曠く喜び洋洋たるが如きあり。抑又歡樂極兮哀情多、少壯幾時今奈老何と歎するが如きあり。シエークスピヤは樂觀せしと見ゆるも、ハムレットの獨語、第六十六ソネットの如く、悲觀すべき點に想ひ及べり。テニソンは進化論を知り、自然淘汰の普遍なるを認めつと、自然界全體に明瞭を缺く多く、生物の運命の知るべからざるに惑ひ、事の覆面に隠るゝを歎じ、更に惑ふと雖も人は運命を支配し、正を正として行ふべしと勵ませり。目的の上に目的を求め、其の上に目的を求むるに、宇宙の目的

の何たるかに關し未だ全く想像の及ばざる所あり、究極の如何を考へざるの穩かならんも、常情を逸せざる者は樂觀もし悲觀もし知らざるを知らずとしながら、部分的に眞に美に善に遷るを認め、全體として亦た然るを認めんとす。或は狭き範圍に於てし、或は廣き範圍に於てし、且つ其の何事にして何故なるかを明言し得ざるも、爾かく認めざれば安んずること能はず。何の世にか目に觸るゝ所盡く退化の現象たるが如きあらば格別、從來の變遷にては爾かく認むるの誤れるを證明するよりも、其の必ずしも誤らざるを證明する跡あり。

—『宇宙』—

亂世必ずしも苦ならず

○亂世必ずしも苦ならず

治世樂か亂世苦か、治世樂あれば、苦も亦た之れ有り、亂世苦あれば、樂も亦た之れ有り、室町時代戰國の名あれども、當時人心のノン氣なること、遊技の盛行を以ても少しく察するに足る。佛國の革命は亂の極、慘の極、而も時の情狀を考ふるに、斷頭臺のにぎはしき、人の深く意とせざりし所のものと如し、宴會の節小なる斷頭臺を卓上に置き、徳利を仕込みたる人形を刎ね、内より血色の酒精の迸り出づるを酌みて一座の興とせるが、之を周旋して笑聲哈々たらしむるは概ね婦人、而して人形は即ち此等婦人の平素疾む所に象れる者なりき。内亂とて左程怖るべき者かは。——〔小泡十種〕

有りさうなる無理

○有りさうなる無理

尾張そこなふ河とこそ聞えし木曾川は、何時の頃よりか美濃そこなふ河とこそ變じたれ。由來を聞けば、徳川氏の勢力にて河筋を美濃へ美濃へと向けしが故なりとの事、昔時有りさうなる無理なり。——〔小泡十種〕

和漢の杜鵑

○和漢の杜鵑

杜鵑の聲、漢詩に之を悲み、和歌に之を喜ぶ、これ果して彼我鳥聲の異なるが爲めか、將た彼我詩人の氣質の異なるが爲めか、抑も彼我實感を同くして詞辭の表出を異にするものありて存するか。——〔小泡十種〕

音樂家の壽命

○音樂家の壽命

國家と社會

音樂は神經を興奮し、短命に終らしむとの説は、事實を以て證據立てられず、アウベル八十九、ケルヴェニ八十二、ロシニ七十八、ヘー
ドニ七十七、ラランド七十六、バイジエロ七十五、スポール七十五、
ハンデル七十四、グルック七十三、ビッチニ七十二、マイエルベル
七十、バレストリナ七十、スカララッチ六十六、バッハ六十五、其他
長命なるの少からず、ベートーフェンと雖も、五十七に達せしなり。
而も夭折せし例を擧ぐれば、バルセル三十七、モツァルト三十五、ベ
リニー三十三、シユベルト三十一、ベルゴレチー二十六、尙ほ他にも
擧ぐべきあり。——(『偉人の跡』)

音樂者と
其の境遇

○音樂者と其の境遇

音樂は耳より腦に入り、見ることも能はず、觸ることも能はず、全く
内心の事に屬す。故に世に對して懐に快からず、若くは他の迫害を
受くること多ければ、其の多き丈け益々逃避の場所を此處に求め、專
心一意、以て慰安を得るに勉む、要するに天下に棄てられて初めて樂
の神に到るといふべし、モツァルト則ち然り、ベートーフェン亦た然
り、尤も樂の神に到るは必しも然らざるべからざる理なく、幸に時運
の好きに會へば、生計に窮せずして尙ほ該域に到達するを得んも、而
も是れ誠に難いかな。——(『偉人の跡』)

三道と世
變

○三道と世變

神儒佛の三道、儒は世教の稱ある丈け、最も多く人を出せり、維新

の先進者藤田東湖、吉田松陰、横井小楠等皆な儒を以て立ち、風雲に際會して臂を草野に奮ひし者亦た概ね幾分か儒に入れり、儒の勢力洵に大なりしと謂ふべし。神は世變に關係ありしも、人に乏しく、たゞ福羽、丸山の如きあるのみ。佛は都合にて出世間的、都合にて世間的、其の俗なるは俗の俗なるよりも俗なれど、身を變に投ぜし者なく、之あれば上品にして月照の薩摩の瀬戸に沈める、下品にして雪爪の越前侯の前に放屁せる、此の若きのみ。——『小泡十種』

斯の愚

○斯の愚

英人は保守を以て名あれど、風俗を頑守すること寧ろ驚くべし、彼れ熱地の濠洲に移住して依然舊を守り、暑中厚ッ羅紗の服を著て平氣なり、白リンネルなど滅多にあらず、洵に愚と謂ふべきも、彼れが個人々々世界に濶歩するは亦た斯の愚より出でずとも限らず。

——『小泡十種』

乾坤人なきの感

○乾坤人なきの感

山中人なき處素より寂寞、然るも山の攢壁累積する尙ほ幾許か人を以て與に俱にする所の感あらしむ、海に浮て一碧萬頃、則ち亦素より寂寞、然るも舟に在るは我れ一人に非ずして談笑意のまよ、よし又獨り海岸の石に坐して瀟漫浩渺を望むとせんも、波濤の哮吼喧闐頻りに静を破ぶり、悚然として畏怖の念を生ぜしむるも、純乎たる寂寞の感を生ぜしめず、純乎たる寂寞即ち乾坤人なきの感は蓋し曠原に在りて

存せんか、而して我國曠原なし、之あるも既に己に開墾せらる、稍よ其形を留むるは淺間の籠の如き是れ、那須野の如き是れ、汽車之を過ると雖も、星斗爛然たる時、單身其間に逍遙せば、彷彿として天と語るの感あらん。——〔小泡十種〕

洒脱なる埋葬

○洒脱なる埋葬

屍に魂なしと思ひつよ、尙ほ何かの希望を屬するは普通一般に然り、たゞ埋葬の事之を重大視すると風流視するとの差別なきにあらず、他年風雨苔石面、誰題、日本古狂生といひ、死表于道、日宋處士謝某之墓、雖死之日、而生之年といふの類、重大視して且つ風流視せんとせし者、近松の辭世文は風流視せんとして風流を得ざりし者、其の他素

著者の力量と讀者の力量

より千種萬別なるべし、而も未だ波斯の基路斯王の如く洒脱なるあらざりしに似たり、歴山の波斯を略せしや、人あり王の墳塋を毀ちしに中に碑記あり、曰く、嗚呼人、卿は何人にせよ將た何地より來るにせよ（實に予は卿の遂に來るべきを知る）、予は波斯帝國の太祖基路斯なるぞよ、冀くは予が尸を蔽へる小許の土を奪ふ迄に酷なること勿れと、これ歴山をして大に運命に感悟する所あらしめたりき。斯の若きは場合も場合なるべけれど、他に例を求むること能はず。

——〔小泡十種〕

○著者の力量と讀者の力量

圓遊の滑稽も、同じ話を二度聽かざるれば面白からず、一と通り書

物を讀みたる上は、大抵の新版物に接して珍らしくなく、ナーニ矢張り進化論なり、その社會説はワグネルよりせり、西洋小説の翻案は兎角變癡奇なりと、事もなげに云ふ、併し自身で試みる段には先輩と同じ事をいふ許りにもなかく、困難を覺ゆるものなり、書を讀で感服するは、必ずしも其の書の優れるに非ずして、或は己れの癖に適應するよし、或は己れの習熟せる外に出でたるよりし、一時大に賞嘆することもありて、とても當てに爲るべきにはあらぬも、何程か尤もと感ぜしむる所の書の著者は必ず何等かに於て我を教誨するの能力あるべし。讀み去て只だ平凡と思ふべき書の著者は、少くとも其の題目に關し幾分か我より力の勝れるか、劣るとも極めて僅々なる者にして、眞

誤譯の通言

に我より力量の降れる者の著譯は著にも棒にも懸らぬほどくだらなく感ぜらる。——『小泡十種』

○誤譯の通言

健康なる身體に健康なる精神ありとは普通の格言と爲り居れども、元と是れメン・ス・サナ・イン・コルボレ・サナを誤釋し、本來單に健康なる身體に健康なる精神といひ、即ち身體の健康と精神の健康とを並稱せしに止りたるを、健康なる身體にして始めて健康なる精神を宿らしむるを得と考へ附けしものとの事、さもありません。健康なる身體に健康なる精神ありとは餘り打掃的推斷にして、斯く有りては才子善く病むといふよりして、才子は健康なる精神なしと謂はざるを得ざるに至

らん、然れども天才或は狂氣に幾しの道理、才の秀づるを以て必ずしも精神の健康を判するに由なく、頭がぎんくする、氣分が悪るくて困まるなどいふ者は爾かいはざる者より精神に不健康なる所ありと見做せば、凡々たる凡流社會にては健康なる身體に健康なる精神ありといふを通言と偽すも差支なし。——『小泡十種』

○糞土能く穀類を生ず

佛道の腐敗珍らしきに非ず、初渡來の當時より千三百年後の今日まで、世として代として腐敗なきはあらず、僧侶は墮落せしに非ずして腐敗し續けしなり、僧侶の墮落といふは蓋し誤れり。然るに糞土能く穀類を生ずるの譬に漏れず、さしも腐敗したる桑門、時に名僧善知識

糞土能く
穀類を生ず

を輩出せること無しとせず、現代にても頗る欽すべき者の在るあり、ただ十萬の僧の徒らに善男善女を欺瞞する觀あるを苦がくしく思ふのみ。——『小泡十種』

○武藏野

『武藏野は月の入るべき隈もなし草より出でよ草にこそ入れ』、『大江戸は月の入るべき隈もなし軒より出でよ軒にこそ入れ』人工の進歩も亦著しと謂ふべし、況して東京と改まり、八州の地うま車むしけ車の横行に任かすに至ては、武藏野の光景、之を觀んとするも其れ能く得んや、開明の難有味深く肝肺に銘すと雖も、天然の再び接すべからざる幾分の憾なしとせず、月明かなるの夜道灌山より目を縦つて眺望

武藏野

す、千里一色、寥廓悠長、洵に胸次の開豁を覺ゆるが如く、而も一たび尺寸の地人跡の印せざる無きを想へば、興味索然、寧ろ上野に鬧熱を視るの勝れるを感すべし。習志野は稍、本來の面目を有すと雖も、時ありて軍隊兵馬の蹂躪する所、生死茲に決せば或は更に一段の妙味を加へんも、たかど例の眞似事の演習、愈々以て殺風景なり。武蔵野の月、語いかにも雅、薄に月を畫き以て是れとするに、畫巧みならずと雖も聊か心を洗ふに足る、而して其の實物や竟に得て觀るべからず。

—『小泡十種』—

藩政時代の治水

○藩政時代の治水

藩政の頃割合に洪水を適るゝに巧みなり、これといふも當時の役人

學者と俸祿

○學者と俸祿

に奸物も有りしなれど、概して自藩を大切にし、眞心に用意せる所ありしが爲めなり。今は縣廳の役人も、中央の役人も、日備根性なるが多く、局に當るの間さへ善い顔するを得ば、跡は野となれ山となれ十年二十年の後は我れ關せずと、事を觀る甚だ不親切なり、故に相應に入費を掛けながら、效は其れ程に見えず、明治年間河川に幾許の金を投じたるか、封建の社祿連に申譯なからずや。——『小泡十種』

中江藤樹伊藤仁齋共に布衣、熊澤蕃山祿を得て仕へしも、元と明君の知遇に感じて一藩の政治を改革し、延いて天下の勢を變ぜんとしたるもの、全く失敗に終りしも誰も、單に斗米に意なかりしや明白、之

を外にして大儒の稱ある者にして能く五百石を受けしは極めて少く、春臺の若き猶ほ二百石にて甘んぜんとしたり、蓋し學者の意氣俸祿の上存せず、道を以て任としたるなり。刻苦勤勉の常ならざりしより觀る、數百石の俸祿は甚だ少しといはざるを得ず、久しき準備を以て僅かの報酬に安んず、即ち其の根柢の鞏くして世に伸ぶるを得る所以、林氏は約んど萬石の身分なりしかど、而も其の然ると共に并せて學者たるの力を喪ひ、後多く云ふに足る者無かりし。——『偉人の跡』

○書の傳不傳

書を著はして百世に傳へんことを望むものあり、誠に愚かものよ、われ曾て一書の凡例に曰ふ、『云ふ、當さに一生の力を竭して千載必傳

傳書の傳不

の言を立つべしと、然るも凡そ人の望む所、是より愚なるあるか、千載に傳ふる者必ずしも超卓の言にあらず、道德經述ぶる所、決して秀絶と爲すべからざるも、而も老子は遂に道教の祖として奉崇今に衰へず、アリストテレスの教、中世に盛を極はむるも、而も其の衆の爲に尊奉せられしは、方に其の淺薄なる處にあり、夫の天文に關する言の如き、全く觀るに足らずして、而して久しく人の據る所と爲れり。偶々精確の言を立て、久しく埋没して數百歳の後に顯はるゝありと雖も、是れ其時や、人の智識適さに此に類する説を認知する程度にまで到達せる者にして、特に其人に待つあるに非ざれば、其の顯はるるや、聊か先見若くは暗合の虚譽を博するに止まり、寸毫も世に裨する所あ

るに非ず。凡そ一派の開祖として永く後世に名ある者、必ずしも其力あるを以てせず、僥倖に出づる者十に八九、而して眞に名を傳ふると亦た何かせん、乃ち今自ら期して大に百世に傳はらんことを望む、俗物の慾のみ、孩兒の見のみ。人は當さに其爲さんと欲する所を爲すべし、笑ふべくして笑ひ、泣くべくして泣き、喜ぶべくして喜び、怒るべくして怒る、茲に足る、其の傳不傳を問ふは、鄙陋の至りなり、況んや異日に大に奮ふを名として其の今の爲す無きを蔽はんとする者の若き、固に言ふに足らざる哉。然れども百世に傳へんと期するは、即ち大著述の出づる所以なりと云はゞ、其れにても宜ろし、友をば百世の下に待つと言ひても宜ろし、但し一層の事、百世に限らず、

個人的花
と社會的
花

なほ進で千世、萬世、萬々世、萬々々々世に傳へんことを期して何似、定めし大々著述の出づるならん。——『小泡十種』

○個人的花と社會的花

薔薇花は一個一個として形線太だ麗、瓣子の均齊幾んど圓滿に近し、櫻花亦た一個一個として形線麗ならざるに非ざれど、薔薇の如く個々に觀るよりも、一木或は數百樹の群花を綜合して觀るを勝れりとす。且つ薔薇花は薰香烈しく、暗に在りて猶ほ愛すべきを覺ゆ、櫻花亦た薰香ある者なきに非ざれど、香は寧ろ梅に譲り、固より是を以て他と並ばんとせず。斯の若きもの果して非か、香は花に伴はざる可らざるかは、疑ひなしとせず、香にして伴はざる可らずば、味も亦た或は必

要なるべし、ガストロノミーは美術なるか美術ならざるかは愈々問題とならん。要するに薔薇花は個々にして形色を目にし且つ香を鼻にすべし、即ち玻璃窓下に好みすべし、即ち個人的なり、櫻花は山野に於て衆と共に樂むべし、即ち社會的なり。——（小池十種）

時代と人物

人物と遠近

○人物と遠近

影の遠ざかるほど大を加ふるが如く、歴史的の人物なるを以て現代の人物に優ると考へらるゝことあるが、之に反し、光が近づくほど明を加ふるが如く、現代の人物なるを以て過去の人物に優ると考へらるることあり。——（『日本及日本人』）

偉人の追憶

○偉人の追憶

過去を顧みるを以て守舊の習ひとするは頗る謬る、人生の事豈に過去を忘れて然る後に向上を期すべきほど窮窟なる者ならんや。修養の

途は多岐なるも、偉人豪傑を追憶し、其性格及び行藏を考ふることも最も有効なる方法の一に居る。——(偉人の跡)

蟹と人

○蟹と人

蟹は體に應じて穴を掘る、人は識力に應じて天地を造る。

——(『日本及日本人』)

時代の前後と其の價値

○時代の前後と其の價値
若し人類を總括して進歩すと爲し、年代を経るに隨ひ、前代の誤れるの知らるとせば、前の後より劣るの明かにして、前に眞とし美とし善とせし所の後に爾か認められざるに至るべく、即ち人は一に後の時代にいでざるを憾むべしとすべきに似たるも、實は此の如く考ふべき

に非ず。數千年前に生れ出でたりとも、當時進むべき限りを進みたりと認めらるゝは、後代に生まれて進むべき限りを進みたりと認めらるゝと何の優劣あるなし。人類は間斷なく連續を追隨するも、或る時代には僅に或る程度まで追ひて止まり、尙ほ大に追ふには更に若干歲月を経るを要し、而して前の時代に或る程度まで進み居らざりせば、後の時代に進まんと欲するも得べからず。前代に於て停滯し若くは退歩するは、何事か劣れるに因るべきが、若し後代の進歩に便益を與ふる所あれば、後代に缺くべからずとすべし、單に時代の前後を以て事を推斷せんは誤れり。亞米利加、阿弗利加、又は大洋洲の土人の如く、常に同一状態なるは、進歩せる世より觀て生存の價値の低しとすべき

も、支那に於て周を秦より低しとし、漢唐を宋明より低しとすべからず。歐洲の中世も、不進歩中に進歩の勢を養ひ、希臘羅馬と近世文明とを接續せるを以て、其間に生死せし者を其の前後より價值なしとするに苦まざる能はず。——『宇宙』

○過去の人物

去る者は日に疎しとは普通世俗の事、人物の判断には去る者の日に明白を加ふるを覺ゆ。政治なり、商業なり、事務の上に現在の人を相手にせざる能はざるも、事務の必要を離れて考ふれば、過去は現在の如く、現在は過去の如し。——『日本及日本人』

○學問活用の時代

過去の人物

の學問活用の時代

明治に於ける教育の進歩は頗る著しく、官立大學卒業生一萬數千、内死亡者百の九に過ぎず、他の諸學校皆な之に準すべきが、大正年間には、此等教育を受けし者、現に受けつゝある者、及び將に受けんとする者の大に活動すべき順序ならずや。明治にも、卒業生は各々職業に就きしも、大抵官吏若くは銀行會社員と爲り、而して新たに官吏若くは銀行會社員と爲り難くなりてより、頻りに就職難の聲を聞く。今後諸學校より卒業生を出だすこと益々多く、大學及び専門學校も増加し、就職難の聲を聞くこと愈々劇しかるべきが、大正年間には、學校の教育よりも、國民各自の能力發揮を主眼とすべし。明治には人を教育するに急にして、其の卒業して何を爲すべきやをまで心配せしも、

既に卒業生の多く、到る處相應の教育を受けし者ありては、學校と職業との聯絡を問ふを得ず、人の尋ぬるは卒業證書よりも能力にして、己れの恃むべきは亦同じく卒業證書よりも能力なり。今は人々各々職業あるべき者と認め、國家に必要な事、社會に必要な事、人類に必要な事を爲すを心掛くべく、早く言へば、前は學問を教ふる時代にして、今は學問を活用する時代なり。教育は益々盛んにすべきも、教育は手段にして目的にあらず、手段は手段とし、能ふ限り目的の爲めに盡くすべし。前には學生が下級より順次上級に上りしが如く、卒業して官廳若くは銀行會社に入り順次下より上に昇りしが、斯く人の境遇を限るは國民の活動を活潑にする道ならず。官廳に入る者は入

り、入らざる者は入らず、銀行會社に入る者は入り、入らざる者は入らず、働く者は働き、倒る者は倒るゝに任かすべし。國家は人に要求する所あり、社會は人に要求する所あり、人類は人に要求する所あり、其の要求は限りなし、其の何を己れに要求するかを考へ、之に應ずるに務むべし。我が日本を米國と較ぶれば、足らざる所多し、獨國と較ぶれば、足らざる所多し、英佛と較べて足らざる所多し、和蘭白耳義等の小國と較べて足らざる所多し。足らずして不可なきは其の儘にすべきも、不可なる者の頗る多きを奈何せん。教育を受けし者は、各々日本と歐米とを比較し、我が足らざる所を補ふに務めんか、必ずや爲すべきの多きに忙殺せられん。——『日本及日本人』

○時代人心と治亂

亂世は二三野心家の権力を争ふに由來するよりも、野心家自ら多數に動かされ、褒めて言へば御輿に擔がるよに過ぎず。徳川家康は曰ふ、治亂は晴雨の如し、雨ふるべきに雨ふり、晴るべきに晴る、亂ると時は亂るよを欲せざるも亂れ、治まる時は治まるを欲せざるも治まると。蓋し經驗にて深く知り得たるなり。治世の續きて事を好み、亂世の續きて無事を希ふは人の常情、有力なる多數が無事を希ふ時、如何なる野心家も亂を起すを得ず、有力なる多數が事を好む時、如何なる政治家も平穩に經過するを得ず。事を好む者は亂を厭はず、他人の見て苦痛とする所、自ら以て愉快とす。——〔日本及日本人〕

○英雄の事業と民力

飛龍雲に乗り、騰蛇霧に遊ぶ、雲罷み霧霽れて龍蛇蟻蝮に同じといふ、英雄の起る、勢に乗ずるなり、勢に乗ずる、或は土地人民の力を假り、或は土地人民の力を假る者を假る、源頼朝は關八州に於ける土地人民の力を假りし者、大江廣元は關八州に於ける土地人民の力を假りし者、平氏の浮華なる藤原氏に模倣し、帝都に威福を擅にするを知りて、土地人民の力を假ることを知らざりしは、其の忽ちにして衰へざる能はざりし所以にして、義仲の越後に出て越中を占め、一舉平氏の大軍を塵にし、長驅して京師に入りながら、平氏に先ちて敗亡に就きしは亦た

妓夫猶ほこれよせん

勢の存する所を辨へざりしに因る。——〔小泡十種〕

○妓夫猶ほこれをよくせん

維新前、勤王の士の稱せらるゝは、主義の爲めに利達を斷念するの避くべからざりしを以てなり。幕府に内通すれば賞せられ、之に反抗すれば刑せらる。若し勤王の運動して賞せらるゝに定まり居らば、遊廓の妓夫も猶ほ其の運動の率先者たるを難たんぜず。勤王を唱ふるの身を殆くする所以なりしが爲め、志士仁人ならでは之を唱ふるを得ざりき。高山彦九郎は、蓬頭弊衣、海内を跋涉し、唯だ將來に回天の功を期せしのみ。蒲生君平が志を枉けて仕官し、今書山陵志等に致たし、勞を以て利殖を計りしならば、何ぞ笛を吹き按摩を業とするを要

忠君愛國と爵位利

すべき。利達を計り得べくして計らず、勤王に、國防に勞苦したればこそ、人をして感奮せしめしなれ。——〔日本及日本人〕

○忠君愛國と爵位利

嘗て皇室の衰へ、武門政治と爲れるは、皇室に盡くすを以て爵位利を得るの手段とせしよりの事、藤原氏が天子を挟み、一門の榮華を貪れば、平氏も同じく之を事とし、北條氏に至り、廢立を行ひ、三上皇を流せり。忠君が爵位利の爲めならば、爵位利の爲めにならざるに何ぞ忠君せんやとの調子なり。事蹟が忠君愛國なるも、動機が爵位利の爲めなるの明かなれば、以て人心を感發するに足らず。蘇我氏藤原氏等が徒らに跋扈跳梁せしかに見ゆるは、榮華を貪るの甚だし

かりしが爲めにして、時に純忠なるあるも、玉石俱に焚くの避くべきにあらず。忠君愛國を以て人心を感發するには、爵位祿利と無關係なるを示すに若かず。和氣清磨なり、楠正成なり、百世の下に人を鼓舞するは、爵位祿利の爲めにせざりしが故にして、新田義貞の之に劣るは、足利尊氏と權勢を争ひしの知らるゝに因る。高山彦九郎が三條橋に皇居を拜し、或は奥羽より蝦夷を跋渉せしは、忠愛の情の切なりしに出で、蒲生君平の貧にして山陵を調査せしは、忠君の情よりし、林子平が貧にして海外の事情を説き、之に應ずべき策を講ぜしは、愛國の情よりし、孰れも爵位祿利の爲めにせざりしを以て維新の先驅者たる形あり。官費を以て山陵を調査し、官費を以て外國の兵制を調査

舊幕、明治、大正に於ける官學私學

し、成績の蒲生及び林に優れりとて、特に忠君愛國たるを覺えず。同一の事も動機の如何にて大なる差違を生ず。唯だ事の跡を観、能く忠君愛國なるを得たるかに振舞ふは、心ある者をして響登せしむるに終る。高山の歌に我を我と思召すかやすめらぎの玉の御聲のかよるうれしさとあるが、若し天覽台覽等の字を大書して自作の書を發賣せしならば、如何の感を人に與ふべきや。似たると似て非なると相ひ同からず、往々全く反對なり。——（『日本及日本人』）

○舊幕、明治、大正に於ける官學私學

舊幕時代は武斷政治に比して學問の進歩し、二百八十年の歴史は學者の歴史と言ふも妨けず。されど官學よりも私學の成功し、官學は面

目なき體たらくなり。寛政年間、林述齋が新たに官學を振作し、一時頗る觀るべきありしも、其の異學禁止の嚴令が幾年ならずして弛めるは、勢の赴く所を示す。後ち聖堂の名の海内に高きに拘らず、維新前後、何の効用を顯はせるか、小藩の私學より却て人物の輩出せるなきか。舊幕時代の官學は失敗せり。明治時代の官學の力の明かなるも、大正は如何にあるべきや。官學者流は大に奮勵せざるべからず。

—『日本及日本人』—

今日の最善と將來

○今日の最善と將來

今日は今日の事を爲し、昨日は昨日に葬り、明日は明日に於てすべしとの言は、或る點に於て當れるを見る。徒らに昨日の事を思ひ、明

日の事を考へ、今日の事を忘るゝは愚の極、今日最善を盡くすは一生を最善にする所以、回顧に時間を費さず、空想に時間を費さず、能ふ限りの力を以て現に爲すべきを爲すに若くは無し。今日最善なる事を爲し、以て一生を過ぐれば、其の生涯や人生の爲すべきを爲し了る者、一の間然すべきなし。されど最善は知り易きが如くして然らず。今日何を以て最善とするか、今月何を以て最善とするか、今年何を以て最善とするか、誰か充分に之を知るを得るや。各々自ら以て最善とする所、其の最善ならずして稍々善、或は不善ならざるに止まり、動もすれば不善に陥り、最不善に陥る。自ら確信し、人も賛成し、而して後に其の誤れるの知らるゝ者少からず。滿志得意、意氣揚々として

従事しながら、失望落膽に終るは皆な當初思慮の誤謬に出づ。或は自ら誤謬を悟らず、死するまで悔いずして、他より觀て全く誤れるの明白なるあり。日の出の勢にて活躍し、到達する所測るべからずと見えつゝ、何時しか雲と散り霧と消ゆるの擧げて計ふべからざるは、最善とする所の最善ならず、却て其の反對なりしに非ずして何ぞ。今日最善とする所を爲すべしといふも、其の最善の知り難きを如何にすべき。今日最善の事を爲せよといふは、妄りに將來の空想に耽らず、宜しく直ちに努力すべしとの意義にして、眞の善の最も善なるを爲すべきを望むに非ず。さらばとて最善を知り得ざるの故を以て之を打捨て置くべき理なく、最善を知るの不可能ならば、之に近きを求むべく、

近きを知るの困難なくば、近きに近きを求むべく、而して是れ少しく將來の争をも考へよと言ふにて足る。——『日本及日本人』

我が外務省と悍馬

○我が外務省と悍馬

我が政府は聊か悍馬使用の危険を感じせしと見ゆ。大石氏を駐韓公使とし、次いで三浦氏を駐韓公使とし、後ち星氏を駐米公使とし、皆尋常繩墨を以て律するを得ず。外務省育ちの山座氏さへ世間の希望を囑せしに似ず、本省に於て好感情を表せず、豪傑肌に懲りたる跡あり。されど斯くて懲るは羨に懲りて膾を吹くの類なり。

——『日本及日本人』

葬らんより利用せよ

○葬らんより利用せよ

コムミッション事件の元兇と目せらるゝ山本大將は、何の缺點あるにせよ、外人と應對するに於て現在の或る大使に劣らざる丈の事あらん。先年歐米を一巡せし時の如き、應對振りの巧みを以て稱せられにき。彼は法網に羅るべきや否や、或は吞舟の魚の免れしが如く見做さるべきや。既に豫備に入りては、海軍に望みなし、さりとして他に希望あるべくも見えず。生きながら世間に葬らるゝよりも、或る國に大使公使として赴任し、貯蓄せる金を傾けて大々の運動を敢てしては如何にや。噂の如く吝嗇至極なれば論外なるが、彼とて幾許か公事を念とし私名を重んずべし。貯金を悉く抛てよと云はず、是れ不可能事なるのみならず、其程の奮發せざるも不可なし。されど外務の支出す

る交際費に幾倍せる金を費す位ゝの事をよくすべし。若し交際費を私し、尙不正契約を結ぶが如き、呆れて口にすべき言なきに窮す。

——日本及日本人——

選舉競争
の人格に
及ぼす影
響

○選舉競争の人格に及ぼす影響

戦争を経て始めて事の演習と違ふを知るが如く、選舉競争を経て始めて世間の實情の表面と違ふを解する者あり。同じく世間の實情を解しながら、其の美點缺點を詳にし、自ら改むべきに思ひ及ぶは、百鍊して名刀と爲るに類し、人を以て反覆常なしとし、欺くべく、買収すべしとし、善い加減に誤魔化すべきに思ひ及ぶは、鉛刀の鍛鍊して碎くるが如し。達して驕ると驕らざると、窮して濫すると濫せざると、

茲に別かる。烈しく競争せる結果、多少性格に影響なきは無く、唯だ其の影響の向上的なるか向下的なるか、各自之を心に問へ。

——『日本及日本人』

○空中旅行と思想

既に飛行船飛行機が長足の進歩を遂げ、昨今の比例にて推せば、二十五年後に空中旅行の普通なるを想ふべし。米洲發見にて思想が變化し、蒸汽機關の發明にて思想が變化し、電氣器械の發明にて思想が變化せしより察すれば、空中旅行の行はるゝに隨て思想の變化するや必ず。影響を被るに急漸の差あり、今日尙ほ中世の思想を懐くの珍しからざれば、或は空中旅行を物質的の進歩として冷笑せんも、何邊に

○創業と守成

か思想の變化を及ぼすを否定すべからず。人類ありてより未だ之れ有らざりし所、空中旅行に引續き、變化に次ぐに變化を以てするが如きあらん。——『日本及日本人』

創業守成は常に混淆し、特に進歩の急なる今日、唯だ創業的守成若くば守成的創業あり。聊か創造的進化といふに類似するが、二者の間全く區別を撤廢するに至らず、明治年間を通じて絶えず新たなる事件の起りしにせよ、初め創業にして後守成なるを疑ふべからず。而して創業の必要なる時、國政の衝に當る者に望むべきは、自らを犠牲にするを辭せざるに在り。大抵創業に際して斯かる人物の出づるも、自ら

を犠牲にするに程度あり、自宅を政治運動の事務所とするも犠牲、身を殺して仁を成すも犠牲、程度の高ければ高きほど効果の大なるを見る。明治政治の代表者は、最初に西郷隆盛、次いで大久保利通、次いで伊藤博文、次いで西園寺公望にして、其時を以て其人を察すべく、其人を以て其時を考ふべし。西郷は政治家として餘りに破格なれど、維新の際に彼よりも適當なる人物なし。維新の政變は自然の趨勢ながら、西郷なかりせば、動搖は長びき、假りに太政官の成るとし、徳川慶喜が太政大臣と爲り、八百萬石の地盤の上に權を振ひ、廢藩置縣を十年も遅延せしめしならん。西郷の猛斷せしが爲め、伏見鳥羽に戦争の起り、徳川氏の政權奉還を事實にし、新政府を設置するを得たるな

り、其の以前に討幕の案を立てし者の少からざれど、性急なるは刑場に斃れ、策多きは敢て發せず、愈々廷議の定まり、幕軍擊攘に決せし時さへ、尙ほ寡を以て衆と戦ふを危み、豫め退路を議定し置きし程なり、唯だ西郷の態度の人意を強くし、怯を勇にし、斷然砲撃を敢てするに及びぬ。幕軍は西郷の彼の如く決心せるを思はず、三萬の大軍を引率せば優に威嚇し得べしと考へ、而して何等威嚇の效なく、却て朝敵の名を被むり、周章狼狽して退けり、當時西郷の一諾は山をも崩すべしと信ぜられしが、其の由りて來れる所は、何時にても衆の爲めに身を犠牲にするの知れ渡りしを以てならずや。後藤象次郎は智略に於て遠く西郷の上に出でしも、薩長と共にしつゝ、幕府に五萬石に取り

立てられんとし、其の氣色の舉動に現はれ、人の信用を得る所なかりしなり。西郷は身を犠牲にするの性質よりして遂に私學校黨に擁せられ、非業の死を遂ぐるに至りしが、彼れ自らは故舊子弟と共に死するの意なりしにせよ、十年の役ありて百姓上がりの鎮臺兵を實地に鍛錬し、將校をして支那と衝突して勝つべきを信ぜしめ、延て露國と衝突して勝つべきを信ぜしめ、能く信するが如くなるを得たり。西郷が身を犠牲にして顧みざりし事、偶然にも此の結果を得たる者とす。得策不得策は末、身を犠牲するの大なる功德あるを認むべし。大久保は此と較べて確かに守成的にして、前後を顧慮し、成るべきを成し、成らざるべきを避けしが、相ひ携へて郷を出で、共に國事に奔走せし丈け、

普通の守成と違ひ、頗る創業の分子に富み、能く西郷の後を承けて國事を處置するに適せり。廟堂の分裂を恐れず、兵亂の起るを恐れず、専ら國政の統一に従事せしは、往々角を矯めて牛を殺しと跡あるも、國家に於ける功勞を没すべからず。實に西郷ほどならずとも、自らを犠牲にするを厭はず、覺悟通りに刺客の手に斃れぬ。後ち寄合所帯の形に於て伊藤が實際の中心と爲り、官制改革と共に首相に推され、憲政の準備に著手す。伊藤は大久保より更に守成的なるが、尙ほ幾許か創業的にして、内政を整理し、對外の發展に及び、内國に死せずして外國の刺客の手に斃れぬ。之に較ぶれば西園寺が政黨内閣を志ざしつ、困難の迫るを見て直ちに内閣を投げ出だし、閑雲野鶴を侶とする

こと、全く犠牲的の心なきに非ざるも、太平の大宮人と何の擇ぶ所ぞ。創業より守成に移れる所、歴々観るべし。——『日本及日本人』

○男女の差別と時代の盛衰

分業増進すれば盛昌し、分業減退すれば衰頽す、是れ論なきなり。男女相異なるは其れ分業の始なるべきか、蜂や、雌強く雄弱く、各其の業を執り、而して社會を結成すること彼の如く、犬や豚や、牝牡形體に差違少く、互に業の分つべき無く、而して三々五々隔離すること彼の如し、人に在りては男強大にして、女弱小、外に出づる者内に留まる者、相ひ待ち相ひ助け、而して大なる社會即ち現出す。然るも人間社會にて、男に於て女を模倣することあり、これ其時や世態は

優美にして、而して柔弱なり、平安時代即ち是れならん、女に於て男を模倣することあり、これ其時や世態は剛強にして、而して粗厲なり、鎌倉時代即ち是れならん、將た又男は男、女は女、各其の宜しきに適くことあるが、其時や世態は剛強にして而も優美、徳川三四代の如き或は幾しとせんか、國運の最も隆盛なりといふは實に男女劃然として特性を保有する時に在り、國家の盛衰を占はんとせば、須らく男女の關係を観るべし。——『小泡十種』

○眼に見えぬ力

世に皮相の美に眩みて内實の效を願はざる徒あり、曾て日の諸遊星を牽引することを説明せる者を嘲て曰ふ、日何を以て然る、之を牽引

する索繩宜しく何處に於て視るべきやと、單に目睹る所を以て事物を推さんとす、胡ぞ其の鄙陋にして窮窟なるや。天言はずして四時行はる、帝默默たり、民默默たり、而して國即ち成る、かの繩墨を執て衆に傲る者竟に何の力かある。——（『偉人の跡』）

道の古今

○道の古今

東よりする者が御江戸日本橋を諺ひ、西よりする者が『花の都は夜をこめて逢坂のゆふつけ鳥にさそはれてなごりをしくも大津迄』を諺ふこともありき、五十三ツギ名所舊跡を尋ね、孰れの驛には何の休泊所、孰れの河には何の渡場、孰れの峠には何の名物と巨細に記憶して往來せるは、眞に昔日の事となり畢んぬ。今はステーションに驅け附

け、汽笛數聲、卷煙草數本、明に彼に達す、山走り、川飛び、屋舎遁れ、責めての事に睡眠を拭うて清見寺、金の鱧、關ヶ原等を指示することあるのみ、全國の鐵道、之を乗り廻はせば、古人の一年に到達せし所は、今人は一月を費さずして優に到達することを得べし、しかし行程の細事を知るは、今人竟に昔人に若かずとせんか。但し是れ獨り有形の道路のみ然りと爲さず、學問を收得する無形の道路、亦實に然りと爲す、昔人の四書五經二十一史を讀むは、猶ほ其の東海道の名所を探討するが如し、一句一章を尋ね、行くこと遅々、進むこと徐々、折角業を卒へたりとて大した事もあらざれど、識得せる所のものは頗る緻密を致せるあり、今は和に、漢に、洋に、古今東西を歴觀すと稱

するは難からず、四書五經も大意を摘むこと造作なし、孔子も堯舜禹湯も三代の盛事も、手の内に批判することを得、而して終に妙趣の得て解すべからざるものあり。高輪に夜明けの提灯を消すの趣味は、蓋し今人の感じ得ざるところ。——〔小泡十種〕

○現代式を悦ぶも將來を奈何せん

實際人の現代式を悦ぶの期間は甚だ短く、青年の頃、熱心に之を言ひ、社會的革命的の近きに在るを思ふも、大抵三十を過ぎて殆ど忘れたるが如く、文藝家の四五十にして之を言ふは、老婆の白粉をつけたるかに見らる。是れ必ずしも現代式といふ語の久しきを意味せざるが爲ならねど、著眼の卑近なりしに出でたる所なきに非ず。謂ゆる現代

現代式を悦ぶも將來を奈何せん

式なる者が將來に如何なるべきやを考ふれば、妄りに之を口にすることを憚らざらんと欲するも得ざらん。彼等は將來を無益とし、現在を以て足るとし、刹那を以て足るとせんも、招かざるに將來の到著し、現代に浮かれつゝ、將來の大なる波濤に覆没するを奈何ともすべからず。

——〔日本及日本人〕

○時代と天才

世に天才の甚だしく、平凡なるの甚だ多きは、皆な獨得の才を具へざるに非ず、具ふる所の獨得の才が時代に顯はるゝに適せざるなり。半雨天なる時、雨は盡く日光を受けて虹たるべき素質あるも、人眼に映するに或る角度を要し、角度に當るは色彩燦然、天の浮橋の如く、

而して他は總て朦々茫茫見るべき無し。人物の構造は雨滴よりも遙かに複雑にして、環境との交渉最も密なり。人に超ゆるの才能あるも、或は藤原時代に適し、或は足利時代に適し、或は織豊時代に適し、或は徳川時代に適し、適するは顯はれ、適せざるは顯はれず。

——『日本及日本人』

○時代と努力

時代が我が才能を大に顯はすことあり、或は少しく顯はすことあり、或は全く顯はざることあるが、初めより著手せず、努力せずんば、才あるも無きと異ならず。努力は徒勞に歸するの恐れあるも、之を敢てせずんば、全く能力を發揮するの機會なし。均しく天才の躬を以て

○現代と歡樂

顯はると顯はれざるとに大なる差違あるは、種々雑多の事情ある中、努力して徒勞に歸するを恐ると、之を恐れざると、頗る異なる。

——『日本及日本人』

今は歡樂を盡すべき幾多設備の成り、若し歡樂を盡さんとせば、今日の如く便利なるなく、唐玄宗の再び生まるれば、前に求めし所の甚だ小なるを覺えん。太液池に百尺の高臺を築くは、何程の事ならず。美貌も世界の廣きに求むれば、必ず楊貴妃に優るを得ん。今後更に便利の開ければ格別、今は古人の夢みざりし程に歡樂に耽るを得。又た此に耽るを賛成する聲高く、黄金さへあれば享樂主義者に今日の如く

幸福なる時代なし。而も假に黄金の手に應じて出づるとし、斯く歡樂を盡すは果して人生の快事なるや、須らく考ふべし。

——『日本及日本人』

○征韓論と民選議院論

漢學者の孔孟の教へたる王道が輿論政治に一致するを思ひ、洋學者は己の崇拜する文明國の政治なるを思ひ、民選議院を必要とするに至つた。征韓論と民選議院論とを併び唱へたのは攘夷と尊王との變形である、尊攘を唱へた者が新に二論を唱へ、尊攘を迎へた世間が新に二論を迎へたのは不思議でない。——『明治思想小史』

○開港と攘夷

開港の爲めに攘夷が消滅したと思ふのは、皇居が將軍の居城に移つたので、皇室が無くなつたとするに似て居る、天皇は二重橋の内に居られても天皇たるに差支は無い、攘夷の名は消滅したけれど、他の名を以て繼續して來て居る。明治元年の詔に「朕茲ニ百官諸侯ト廣ク相誓ヒ列祖ノ御偉業ヲ繼述シ一身ノ艱難辛苦ヲ問ハス親ラ四方ヲ經營シ汝億兆ヲ安撫シ遂ニハ萬里ノ波濤ヲ拓開シ國威ヲ四方ニ宣布シ天下ヲ富岳ノ安キニ置ン事ヲ欲ス」とあるは尊王攘夷の名に於て希望した所のもを明白に言ひ現して居る。——『明治思想小史』

○對外政策としての攘夷

相互に貿易しながら己の利を圖つて他の利を顧みぬとあつては不條

理に氣が附くが、初から貿易で利を得やうと思はず、我が國の事は我國丈で足りる、他國に用事が無いとして居る時、他國より貿易を望み來れば餘計な事を望むと思ふのは普通の順序である、殊に軍艦を以て迫り來つては亂暴至極と思ふのも無理は無い、彼れ兵を以て向ひ來れば我れ兵を以て應ずべきであると爲し、此に攘夷の聲が盛になつた、詰り攘夷は其の當時に在つて對外政策の發表である。

——『明治思想小史』

夷狄と國際法

○夷狄と國際法

昔は何の國も他國を夷狄とした、支那許りでなく希臘羅馬皆さうである、而して夷狄は兵力を以て討ち平らぐ可きものとした、後世の國

狼狽よりも鋭敏

國際法に照して征夷攘夷の語を見れば如何にも不穩當であるが、古代の國際的關係は盡く斯かる有様であつた。——『明治思想小史』

○狼狽よりも鋭敏

維新は明治維新に限ることになつたが、維新を思立つたのは一朝一夕で無い、唯事志と違つたのである。武陵桃源徒らに惰眠を貪つた様であつても頗る外國の刺戟を受くるに鋭敏であつて、外國船が何邊に著いたとの報告があれば、發憤して立つのがある、彼に負けまいとするのがある。間宮なり、近藤なり、錢屋なり、高田屋なり、孰れも探檢若くは貿易に従事した、國禁を犯して貿易する者があれば、國禁を犯して蘭語を學ばうとするは勿論であつて、多數は與り關せぬにし

ても、若し外國と交通が繁くなれば、更に一層強き刺戟を受くることを示して居る。一度米國軍艦が浦賀に到來して全國の動搖したのは偶然で無い、國民が國事に注意するやうに成つて居つたのである、其の狼狽したのを嘲るよりも、其の刺戟を受くるに鋭敏であつたのを賞すべきである。神經質に過ぎた嫌あるにせよ、遲鈍で無かつた丈の事はある。——『明治思想小史』

○勇氣を要する時代

勇は決斷忍耐等を含み、人に缺くべからざるが、社會多數の之を要すること近世の如く甚だしきは無く、中にも近年を以て最も甚だしとす。往年勇を以て軍人の事とし、他に多く言ひ及ばず。義を見てせざ

勇氣を要する時代

るは勇なきなりとあれど、義士は僅に計ふべきのみ。而も今は然らず、苟も社會に立つには勇なくして叶はず、米人の最も感知せるは、勇を以て世に處せよといふに在り。猛進せよ突進せよといふに在り。實は米に在りては、進んで勝たざれば退て敗れざるを得ず。而して其の頻りに猛進するや、世界に競争し、到る處懦弱者流を蹂躪せずんば已まず。——『日本及日本人』

○人としての藝術家

藝術は藝術のみにて貴く、他の何物をも加ふるを要せざれど、純藝術家は人として傳ふべき者少く、政治若くは社會に關係ある藝術家は、藝術品の傑出せざるも、性格と關聯して特殊の興味を覺えしむ。

人としての藝術家

—(日本及日本人)—

器の大なるもの

○器の大なるもの

政治趣味ある者、社會趣味ある者、藝術趣味ある者、概ね各自一方に偏し、他の趣味を解せざるが、偏するは器の小なるよりし、其の大きを加ふるに従ひ、他の一若くは二を容れて綽々餘裕あり。政治の大事にして政治に専らなる者、藝術の大事にして藝術に専らなる者あれど、これを併せる者の著るしく歴史に顯はるゝに若かず。徳川五代將軍の如き宋の徽宗皇帝の如き、藝術趣味に富みし丈け失政の多かりしも、豊臣秀吉の如き、唐の太宗の如き、リシエリユーの如き、奈破崙一世の如き、國權を擴張すると同じく藝術の發展を促がしたり、佛國は藝術家

にして政治趣味に富める者の少なからず、現にパンテオンに祀らるゝ藝術家は皆な政治趣味に富み、政治に影響せしものにして、ヴォルテールなり、ルソーなり、普通の藝術家と趣を異にするにせよ、一は稀代の大才にして、單に藝術家としても優に地位を占むるに足り、一はさまで大才の顯はれざりしも、小説若くは音樂に非凡の才を備へしと察せらるゝが、孰れも政治上及び社會上に残せる印象の消滅せず、祖國の偉人と稱せらるゝも其の故なりとす。ユーゴーなり、ゾーラなり、純藝術家として取扱ふべきも、其の國葬せられしは純藝術よりも政治若くは社會に關係ありしが爲めにして或は帝政に反抗して國外に放逐せられ、或は軍人に反抗して裁判を争ひしこと、頗る與かりたるべく、

共和が顛覆する。曉バンテオンより排斥せらるゝを免れず。

—(日本及日本人)—

得要領、不得要領

○得要領、不得要領

議會に於ける質問答辯の要領を得ると否とは、得要領及び不得要領の談柄を作ること多きが、得要領及び不得要領はさる狭き範圍の者ならず。質問に答ふるや、甲は乙よりも得要領、丙は更に乙よりも得要領なるが、其の故を以て丙を乙より重んぜず、乙を甲より重んぜず、却て最も答辯の不得要領なる甲を重んずることあり、實は小事に得要領にして大事に不得要領なるあり。小事に不得要領にして大事に得要領なるあり、彼の謂ゆる得要領は小事に得要領なる嫌なきに非ず。西

郷従道侯が要領を得ずして重きを成したるは、大事に要領を得たればなり。或る文相が頻りに焦慮し、計畫し、變改する所ありながら、愈愈眼勉して愈々信望を失ひしは、末節に要領を得て大體に要領を得ざりしのみ。要領を得るとは談話に要領を得るに限らず、行爲にも要領を得るを意味し、行爲とても四角四面、鯁鋒張れるのみが要領を得るに非ず、何等捕捉すべき無くして要領を得るあり。要領は一々眼に見るべからず、或は愚人の觀て得要領とし、智者の觀て不得要領とするあり。或は全く之に反するあり。世界は或る部分の知られ、或る部分の知られず、知られざる部分の知らるれば、更に知られざる部分の出づ。此と同じく、不得要領を得要領とし、新たに出でたる不得要領を

更に得要領とする所に進歩の顯はる。得要領あれば、必ず不得要領あり、不得要領は進歩すべき餘地あるを示す。不得要領を以て輪廓の大きなりとするは、幾許か斯かる意義よりす。されど不得要領は進歩すべき餘地あるが故に貴く、不得要領なる儘に終はれば、何の稱すべき無し。不得要領は進歩すべき餘地あるも、我國にて不得要領といふは、概ね不得要領の儘に終はる。歐米にも不得要領なるの多けれど、我國にて不得要領とする所の既に得要領と爲れる者少からず。

—『日本及日本人』

田園と偉人

○田園と偉人

世人常に謂ふ、英雄豪傑、磊落個儻の士は必ずや階畝の間より崛起

し、會て都會に生るとあらずと。固より篤論にあらずと雖も、蓋し一世を動かす英雄豪傑は多く村落邑里より出づるが如し、乃ちクロムウエルのハンチンドンより出たるが如き、ビスマルクのフリドリッヒスルーより出たるが如き、其他擧げ來れば、苟も名を當代に擅にし、譽を後昆に垂たる學者、事業家、詩人、義士の如き、身を村閭茅屋の下より起し、而して遂に天下に雄飛するに至りし者極めて多し。是れ都會に生れ、都會に長じ、都會に老い、畢世齷齪として都門の中に生活するは、尙ほ畢生一家中に屏息すると同じく、天地狹小、宇宙短縮、更らに活潑、清澄、宏大、雄壯、偉麗なる心氣の伸ぶるなければなり。

—『小池十種』

○涙脆きもの

林子平は、高山彦九郎を謂て渠れ泣癖あるのみとせり、彦九郎實に泣癖あり、而も其の泣くや至誠に出づ、敬すべきなり。世間時に能く泣き、而して絶えて誠心なき者あり、詐偽師、奸商、探偵等に之れあり、演説遣ひ、出張官吏、事業發起の觸れ廻りに亦之れあり、涙脆きは油断のならぬ者なり。——『小泡十種』

○薩摩武士の習慣

大義名分の爲めに頑強に闘ふは大に稱すべきも、一身の私利の爲めに非を飾り、死物狂ひに闘ふは、九州の果てなる野武士の習慣とすべく、而して野武士的に奮闘せるは山本に至りて極まる。

○一部眞面目、一部滑稽

大隈伯の百二十五歳説を唱へたる、人の教を受けんとする者少からず。富貴にして餘命幾もなきを考ふる者、人生の果敢なきを感ぜざるも、頗る物足らず感すべく、或は邸宅を宏壯にし、公債を累積せるの何の爲めにせしかを怪むに及び、願くは長壽にして更に生活の幸福を味はんと、さてこそ伯に教を請はんとするなれ。伯は徐ろに説いて曰ふ、壽なるも、老するは益なし、壽にして老せざるの途は、貪慾を去るに在り、善く集め善く散すべし、學校に寄附するが如き、最も効能ありと。聴く者解するが如く、解せざるが如く、其の特に寄附せざる

より察すれば、教に従ふを欲せずと見ゆ。斯かるは言ふ者一部眞面目、一部滑稽、聴く者も一部眞面目、一部滑稽、遂に要領を得ずして終はる。——『日本及日本人』

乃木式標準

○乃木式標準

乃木式の標準の是非を疑ふ者あり、乃木は破格の人物、破格を以て尋常を律すべからずといふ。されど破格とは畢竟何事なるか、大將が切腹せしを以て、總ての人に切腹を勧るの愚劣なる、言ふ迄もなきが、大將の職分に生死し、職務に專一なりしを以て、總ての人に向ひ、務めて此に類似せよといふは、理の最も當れるものならずや。或は人生の牢獄ならず、窮屈なる法則を以て束縛すべきに非ざるを説くも、現

在の國家に生存して將來を慮れば、愈々益々職分を念とせざる能はざるに非ずや。牢獄といひ、窮屈といふも、何人も軍人たれと強迫されず、官吏たれと強迫されず、何時如何に何職に就くも、其人の自由なり。人生れて自由、自由を得ざるは力なきが爲めに於て、苟も力あれば、何處に居りてか自由ならざらん。好ましき職に就き、好ましからぬ職を去り、進退去就に於て何の逡巡すべき無けれど、職に就て之に専らならず、専らなるも久しく安んぜず、轉じて他に就き、三轉し四轉し五轉するは、自由といへば則ち自由、而も自ら省みて不見識を覺えずや。人心の異なること面の如く、能力の異なるも同じく然り。各自之を發揮するは、多くか少くか同胞人類に益する者にして、稱し

て其人の職分とす。何人にも職分あれど國家に在りて、官吏は職分の
廣く人に知らるゝ者にして、如何に之を果たすか、全力を致すか、少
しく力を致すか、世間に影響する所尠からず。而して職分を果たすに
際し、何の標準に於てすべきかは、議論に於て際限なく、唯だ乃木大
將を觀よと言へば足る。——『日本及日本人』

○何處にも小袁世凱あり

世には才略餘りて誠意足らざる者の少からざるが、袁は其の大なる
者にして、其の小なるは到る處に觀るべし。人に備るを求むべからず、
才略餘りて誠意足らざるば、其の才略を採るべく、誠意餘りて才略足
らずんば、其の誠意を採るべきも、誠意の減少する比例に於いて社會

何處にも
小袁世凱
あり

の衰頹するを期せざらんとするも得べからず。治世にても首腦者の誠
意なきは衰頹を示し、亂世にても首腦者の誠意あるは興隆を示す。英
國の革命は種々の事情に由來し、理に合はざるの多けれど、クロムウ
エルなり、ハムデンなり、誠意を以て行動せる跡の明白なるあり。米
國獨立は決して米國の教科書に記するが如く單純なる者ならず、種々
厭ふべき事あるも、殆ど何人もワシントンの誠意を疑はず。混亂の極
なる佛國の革命さへ、國政の衝に當れるは多く誠意を缺かず、ナポレ
オンとても、徒らに權勢を握るよりは、萬難を冒かして理想を實現せ
んとせるなり。苟も肝要なる場合に誠意の認むべくんば、才略の競
争、權勢の争奪、必ずしも深く憂ふるに足らず。殺人劍の活人劍たる

が如く、人を害するの才略は人を拯ふの才略と爲る。唯だ全く誠意の認むべき無きは、愈よ才略を運らして愈よ弊惡の増進するに終はる。支那人に誠意の認むべき無きに非ず、黃興の如き、確かに其の一人なるも、常に中央政府より遠ざかり、若し中央に居れば、自ら誠意を枉ぐるか、又は不測の危険に陥るか、其の一を擇ばざるを得ず。假大總統として民國を代表する袁が、才略餘りて誠意足らざるは、順序の自然なるも、民國の發展の爲めに不祥事なりと謂ふべし。彼より誠意ある者にして大總統と爲り、彼が副總統と爲れば、將來に希望を囑すべきも、從來の状態を以て察すれば、前途暗澹たるを免れず。我が日本にも才略餘りて誠意足らざる者の珍しからざれど、明治維新に傑出せ

し者は孰れも誠意の認むべく或は誠意の外に探るべき無きあり、後ち首相たる者に如何はしきあるも、誠意を缺くこと袁の如く甚だしからず。況や明治天皇の上に在はしあり、如何に大臣の疑はしきにせよ如何に政商の疑はしきにせよ、支那と同列に觀るを得ず。されど疑はしき者の多く、中に袁に似て小なる者あるを掩ふべからず。袁より誠意あれば、其れ丈け才略に於て劣り、才略に於て劣らざれば、誠意をも缺く。實に内閣に小袁世凱あり、閣外に小袁世凱あり、何處にも小袁世凱あり。——『日本及日本人』

○ 口實

自由よ、如何に罪惡が汝の名に於て遂げらるよよ。斯く叫ぶの避く可

らざりしならば、改過よ、進歩よ、時勢の變遷よ、實際の必要よ、如何に虚言が汝等の名に於て吐かるよよ、斯く叫ぶの最も當代に切實なるを覺ゆ、前月は認せし所、今月否認し、前月否認せし所、今月は認し、恬然恥ぢず、音に恥ぢざるのみならず、修養者流は過ちて改むるに憚らざるを言ひ、新知識者流は利那利那に思想變じ進歩の已むこと無きを言ひ、實際家者流は、墨守を愚とし、圓轉滑脱、彼も一時此も一時なるを言ひ、相ひ率て言を食み、絶えて其の咎むべきを感せず。

——『日本及日本人』

財力ある政治家

○財力ある政治家

財力ある政治家たらんと欲せば、二三十歳若くは三四十歳頃に財を

積み、然る後ち一意専心政治に努力すべし。世に政治といふ職業なく、或る有利の事業に従事しつゝ政治に關係すべしとの説あるも、是れ群小政客を戒むるの言にして、苟も有爲の政治家たるには是非共政治に一心なるを要す、何國にも片手間に政治に與かりて大政治家と爲れるはあらず、四五十歳にして政治に専なるを得ざれば、巨萬の富を積むとも最早や政界に雄飛すること能はずと諦むべし。グラッドストーンは父の遺産にて一生を政治に委ね、以て彼の如きを得たり。チエムバレン氏は少壯にして貨殖を事とし、三十八歳より全力を市政及び國政に致たし、以て彼の如きを得たり。ルーズヴェルト氏の今日ある、家計の豊かにして後顧の憂へなく、思ふ存分に活動し來れるに外なら

す、財力ある政治家は一の原動力として進退し得るに相違なきも、或る年限にて營利を斷念し政治に専一ならざる以上、二兎を逐て一兎を獲ざる結果に終らざらんこと難たし。——〔偉人の跡〕

○才に用ゐらるゝもの

昨は東、今は西、往くとして可ならざる無きは、夫れ丈け才に富めるに相違なく、庸人の企て及ぶべきに非ざれど、此の如きは己れ自らの主たる能はず、才を用ゐるよりも才に用ゐらるゝの嫌あるを奈何せん。國家の統治を要すると同じく、個人亦た頭腦の統治なきを得ず、萬藝に通すべき才能を屈して之を一事に集注するは、其の人に取て頗る苦痛にして、腕の鳴るが如き心地せんも、此の苦痛を忍ばずんば、

才に用ゐらるゝもの

生存の方針を定むべからず、ブローハム卿は萬能の人、文事に於てマコーレーを壓倒し、政事に於て首相メルボルンを壓倒せんとし、尙ほ科學に於て大發明を企てたりしも、何事も半分を能くすと云はれたり。斯かる人にして斯くまで多才ならざらんには、何事か大に成し遂げ得たるべきに、自ら才能を調節せず、其の逸出する儘に任せたるは、獨り其の人の爲に憾むべきに非ず。——〔偉人の跡〕

○謙信と信長

信長は凡俗の目して蓋世の雄とし、謙信の認めて僅かに庸衆に超えたりと爲しし者なり。群雄方隅に割據し、唯だ鬪争を之れ事とせる時、信長獨り險を捨て夷を取り、力を用ゐること少くして功を成すこと多

謙信と信長

し、凡俗乃ち嗟賞して以て大智なりとしたるも、謙信は以て大智にあらず、猿智慧なりとせり。信長三千騎を以て今川の五萬に當り、親ら槍を揮ひ衆に先んじて直に牙營を斫れり、凡俗乃ち驚歎して以て大勇なりとしたるも、謙信は以て大勇にあらず普通の事とせり。應仁以來、王室式微、宮闕頽廢、人復た再造に意なきに、信長勲々置くことなく禁内を修めて能く帝座を安んずるに及べり、凡俗乃ち以て大忠なりとしたるも、謙信は以て大忠にあらず、僞忠なりとせり。凡そ信長の凡俗を震駭せし所、皆な謙信の微笑せし所、謙信の八州の兵を統べて西上の途に就きしも、其れ亦自ら信すること篤く、信長一輩をして天子を挾みて譎詐を逞うせしめんより、寧ろ乃公進んで大政を參畫する

に若かずと斷ぜしに因るのみ。謙信の壽一二年長かりしならんには、信長の倒ると特に明智を待たざるべく、謙信死して信長雀躍し天下大に定まると叫びしも良に以あるなり。——『小池十種』

○スコットとバイロン

同一の範圍内に競争の起るの自然にして、力量の相ひ拮抗すれば互に相勵み、孰れか一方の劣るの明なれば、愚者は徒らに他を誹謗し、智者は黙して別に己れの長所を發揮するに務む。力量の劣りて其の勝れる者を誹謗するは、嫉妬の卑劣なる所以にして、誹謗は自らの損失に終るが、愈々力量の足らざるを知りて退くは、自ら處置するの巧みなる者なり。ウオーター・スコットは詩作を以て詩名を博し、「マ

ルミオン』ゼ・レデイ・オヴ・ゼ・レーキ」等を發刊し、世評噴々たりしが、「ゼ・ロード・オヴ・ゼ・アイルス」を以て好評を得ず、偶々バイロンが勃然として興り、一世を聳動してより、スコットは詩を作らず、全力を小説に注げること、自ら處置するの甚だ巧みなるを見る。スコットが詩作に従事する間、其の敵とする所はバイロンにして、之が爲めに詩名を犯されざらんとし、其の失敗せんことを希望すべき順序なるが、力量の劣りて其の優れるを恨まんか、スコットの煩惱は破産の煩惱に幾倍したるべし。而も彼はかく愚ならず、己に優るあるを認め、早くも之に譲り、別に他人の未だ足を入れざる方面を開拓するに従事す。自ら新方面を發見し、之を開拓するに敵あるべくも無く、遂に散

文を以て詩に於けるシエークスピアを嗣ぐ。——（『日本及日本人』）

歴山王と上杉謙信

○歴山王と上杉謙信

歴山大王は敵を衝くこと至て猛烈、兵を率ゐること至て嚴刻、而も人の爲めに泣き、衆と共に樂めり。東洋に歴山大王に似たる者を求むるに、支那には遂に有るなし、我國にては其れ上杉謙信なるか、謙信をして西に生れしめば歴山たりしなるべく、歴山をして東に生れしめば謙信たりしなるべし。人或は歴山の波斯埃及を併せて印度に到り、而して謙信の徒らに川中島を争ひ空しく關東を通過せるを以て比較倫を失へりとせん、而も是れ皮相の見る最も甚だしき者なり。希臘附近を併合せること、謙信領する所の越後、越中、加賀、能登、飛驒、信

濃、上野、佐渡と大差あらず、歴山の遠征の途に上りしや、兵は三萬五千、糧食の用意は一ヶ月、謙信の西上の途に就きや、謂ふ所の兵十餘萬、實數を何程少く積るも畏らく歴山より少からざりしならん、歴山の向ひし所地狭く、謙信の向ひし所地狭し、これ因の同くして果の異なるべき所。謙信にして壽長からんか、信玄の豫言せしが如く必ず全國を統合せしならん、希臘にして小半島ならず、毎に隣國と葛藤を生ずるの恐あらんか、歴山豈に中を空にして萬里遠征を事とするを得んや。人物より觀じ來れば、謙信と歴山と幾んど同體。——〔小泡十種〕

西行と直實と實朝の轉業

○西行と直實と實朝の轉業

西行法師は元と北面の武士、將に檢非違使に任ぜられんとし、若し

其の儘に繼續せば、保元平治の亂に與り、多少の戦功を立てたるべく、而も一轉して超俗の歌人となり、人物と歌調と、他の何國にも類を見ず。熊谷直實の蓮生坊と爲れる、薙髮其事は小事なるも、後世説教に好材料を供給せしとすべく、若し其の事なければ、直實は他の幾多武人の間に列し、有るも無きに異らざらん。實朝は性質温順、武將の職は名の實に副はざるも、假りに武將相當の技倆ありしとし、武に従事すると、文藝家と爲ると、孰れの可なるや。武に従事するが當然の順序ながら、當時既に國內平穩、唯だ政治を統裁するの外なく、後より觀れば、山家集後に金槐集の遺れるを以て比較的價値あるを見る。

○近視者流

山本伯が桂公に辭職を促し、政友會を麾いて内閣を組織するに當り、さすが權兵衛なりと人多く舌を捲けり。幾年か人目より遠ざかりて海軍を統率し、陰に陸軍に於ける長閔首領山縣公と對抗し、一朝機會を得て幕地に首相と爲るなど、到底常人の事ならず、世は山本の世と爲り、閔は長より薩に移れりと見えけるが、好事魔多し、收賄事件の爲めに總辭職するの已むを得ざるに立ち到り、爾來權兵衛は有れども無きが如く、偶々存在を認むる者は其の醜魁たるを憎むのみ。彼れ山本伯が何程收賄に關係あるやは裁判にて公けにされず、辯護する者は依然其の罪なきを言ふが、若し彼にして大政の衝に當るの意ありしな

らば、自ら收賄を避くべきは言はでもの事、其の嫌疑をも避けざるべからざりしなり。彼は百萬長者に數へらるゝが、政治運動に金を費せる跡なく、政治運動に費さずんば、俸給賞與及び其他正當の收入にて生計に十分なるべく、特に貨殖するの必要なし、況んや不正手段にて金を得るが如き、武臣たるの身分を以て萬々一も有るべからざる事に屬す。然るに公文書にて事實を證明せられずとも、兎もかく吾身に嫌疑あるの故を以て内閣總辭職するの羽目に陥れること、何分にも不覺千萬の次第なり。彼は此頃悔悟し居ることなるべく、早く斯くと知りたらば、自ら清廉潔白にするの外、尙ほ進んで海軍部内を刷新するに努めたるべし。海軍の口錢問題は由りて來ること久しく、彼れ或は先

輩に習ひ、習ひ性と爲りて其の非を知らざるに至りしならんが、罪惡を犯して終身法律に問はれざる者あるにせよ、之を僥倖して以て世間に傲らんとするは、如何にも淺ましき了簡なり。腐敗せる空氣に在りて之を呼吸せざるの困難なるも、因業爺の如く金を抱いて死せんとならば格別、既に海軍を以て功を立て、尙は政治家として世界に顯れんと志せば、常人の困難とする所を忍び、金錢に關し一點の疑を受けざらんと心掛けざるべからず。彼は慾に眼を掩はれ、前路を視ずして溝に落ちにき。齋藤前海相なり、松本前中將なり、皆盲人に手を引かれて溝に落ちぬ。後悔先きに立たず、以外の出來事として残念がらざる以上、必ずや後悔し居るべく、惜しい哉、後悔は後れたり。

○神韻縹渺

—(日本及日本人)—

凡そ事は進むの望ましく、退くの望ましからず、退くは萬已むを得ざるの事、隨て名譽ある進軍多きも、名譽ある退軍少く、政治家に在りても勇進多くして勇退少きが、而も其の少き勇退を敢てしてこそ、凡鱗の群を脱出するを得るなれ。ワシントンの人格は英軍と健闘する所に見るべきか、三たび大統領に選ばれんとし、斷然辭して田園に歸耕せし所に見るべきか。批評は區々なれど、少くも其の勇退は傳記をして神韻縹渺たらしむる者なり。ガリバルデイが一たびカブレラに退いて復た出でざりしならば、半神半人と見えたらんと言はるよも同じ

く然り。——『日本及日本人』

拙勇退の巧

○勇退の巧拙
乃木大將の自盡は勇退の最も勇なる者、若干の非難あるにせよ、大將の事を聞く者は必ず多少感奮する所あり。非常の事は常法とし難く、何人にも大將の如き自盡を望むべくも無けれど、位人臣を極むる者は、如何に退くべきか考ふるの必要あり。山縣公は自ら處すること甚だ巧みなるが、公にして骸骨を乞ひ、萩に歸りて故舊と共に夏蜜柑を培養せば、徳を高むること現在に幾倍すべし。——『日本及日本人』

敵とする所

○敵とする所
人の性質及び境遇の千差萬別なるが如く、之に對する敵も千差萬別

人の己れを知るを憤るもの

なるが、人各々特殊の敵あり、時として友とするよりも敵とする所を以て其の人となりを知るべし。奈翁一世の如く自ら友なしと稱する者は、寧ろ敵とする所を以て性行を判断すべし。——『日本及日本人』

○人の己れを知らざるを憤るもの

己れの社會に有用の材なるを知り、之を埋没するを以て社會の損失とし、能力の發展を妨ぐる者を攻撃するは、社會の爲めに努力すると同じきにせよ、其の果して有用の材なるや否やの決定し難く、人の知らざるを憤るは我儘氣隨たるを免れず、且つ實に無能にして到底世に益するに足らず、唯だ人の知らざるを憤り、之を攻撃するも少なからず。——『日本及日本人』

○教育と人材

教育と人材と何の關係あるかは古來の問題にして、一方に讀書萬能を唱へ、一方に讀書無用を唱ふるの常なりき。今日の意義にて、讀書と教育と相同じからず、教育は讀書の外に施す所の多きも、畢竟するに趣旨は一にし、古人の謂ゆる讀書は、今日の謂ゆる教育なり。梁の元帝、西魏に寇せられ、戰敗れ勢蹙まり、歎じて曰ふ、讀書萬卷、猶今日ありと、圖書十餘萬卷を焚いて出で降り。歎息する者の愚なるは言ふ迄もなけれど、其間に一片の警戒なきに非ず。王安石は讀書を誇り、趙抃の意平かならざるを見て云ふ、吾輩書を讀まざるに坐するのみと。抃は云ふ、皐夔契、何の書を讀むべきかと。安石も答ふる

○時代と人物

こと能はず。安石は宰相の能あり、大體に通じ居りたるべきに、尙讀書萬能を唱ふるに傾けり。支那は讀書を重んぜし國、其早く開けしも幾許か之が爲めとすべきが、之に伴へる弊の甚だしきに過ぎ、嘗に讀書排斥の聲の絶えざるのみならず、非讀書子にして讀書子を支配するの跡屢之有り。現大總統袁世凱氏は讀書に於て全く言ふを値せず、之に比すれば、孫文氏なり、黃興氏なり、學ぶこと頗る多きも、實際の政戦に於て袁能く實權を握り、他は之を如何ともするを得ず。今後この事の測り難くとも、最近の支那政界は非讀書子の勝を制し、讀書子の敗に終れるなり、——（『日本及日本人』）

何時にても、事の稍、困難を告ぐると共に、先づ問題と爲るは人なり、曰く何人か適任なる無きか。何人か難局を處する無きかと。英雄豪傑に就て議論多く、或は悉く時代の産出する所、時代を離れて平凡と異らずと曰ふも、實際に臨んで人を主題とせざる能はず。漠然時代に對するよりは、時代を背景とする人物を相手にするの便利なるを覺ゆ。

今日主義者

○今日主義者

碌々たる者が今日若くは今一月を樂しく暮らして得々たるは言ふ迄もなく、水平線を出づる者の之と擇ぶなきは屢々見る所、近く北濱銀行破綻よりして拘引せられたる岩下氏一派の如き、其の著るしき例

の一なり。氏は夙に兎角の評あり、或は危険視せられしも、一種才幹の衆に超え、間々事に臨んで人の敢てせざる所を成し遂ぐ。自ら曰ふ、日本國中、才に於て吾に及ぶ者なしと。大阪に財權を握り、桂公をして己れの別荘に靜養せしめし頃、一代の才物の如く考へられたる偶然に非ず。されど其の力を伸ばし來れる所、後より顧みて甚だしく誤れるのみならず、幸に破綻なきを得るも、全く無意義なる者多し。豪奢に於て人を凌がんとし、盛時に華美を競ひしは勿論、既に銀行を潰しながら、尙ほ奢り三昧に耽り、家人をして心痛に堪へざらしめぬ。餘力を示して回復を僥倖するの意なりしやも測られねど、失敗の後より考ふれば、其の生活は水面に波紋を造り、暫くして消滅するに異なら

す。精力家の評判ありし其の精力は悉く無益に費されたり。氏にして今少しく將來を慮り、精力を適當に費したらんには、何事か世に貢獻する所あるを得たらん。中西萬藏の如きは一の滑稽漢と謂ふべく、意義の如何を問ふ要せず。——『日本及日本人』

○明治大帝と維廉一世

明治大帝と維廉帝と、艱難に成長せられ、後ち聖運の開くるも、頗る質素に在はし、質素の點に於て殆ど全く同じかりき。帝は純乎たる軍人肌にして、軍人流に生活し、剩へ酒を節し、煙草を喫せず、日々規則正しく、一刻をも違ふる無く、侍臣或は帝の座臥進退を觀て己れの所持の時計を直せり、我が 天皇は大元帥に在はしませど、武に専ら

明治大帝
と維廉一
世

ならず、文にも兼ね通じさせ給ひ、自ら情狀の異なる者あり。綸言汗の如くなりしと共に、親裁に先んじ、沈思熟慮せられ、時間の如きも豫め推し測り難かりしこと稀ならず。文武に通じさせられ趣味に富ませられ、複雑なる政變に臨み、最善の道に導かせ給へり。議會ありて以來、屢々困難なる問題の出でしが、獨帝とビスマルクとにては、或は平地に波瀾を起したらんと察せらる、我が政府にても、無用の波瀾を起しよかど、要するに圓滑なる推移の多かりしと謂ふべし。帝は一にビスマルクを信任せしが爲め、皇嗣フリードリヒ三世とビスマルクとの衝突あり、次で現帝維廉三世の更にビスマルクと衝突し、之をして不平を唱へて已まざらしめぬ。我が 天皇の臣僚は齊しく 聖徳に感泣せざる無く、

爵位官祿なき者こそ或は批評もすれ 恩典に浴せる者は一語の不平なく、孰れも殊恩に感激せるのみ。伯林の宮殿、深更に燈光あり、臣民は遙に帝の影を觀て其の勵精に感じ、興國の偶然ならざるを知れり。我が九重雲深く、臣民の窺ひ得ざる所なれど、尙ほ 天皇の御勵精を感銘せざるあらず、君主とせず、個人とし 天皇の偉大なる性格を備へさせ給ふを認めたり。維廉帝の崩御に際し、獨國議會議長は弔辭を陳べて曰ふ、獨逸統一の事業を建設せし大なる皇帝は崩御せりと、簡にして盡くせり。我が 明治大帝に對し奉りては、更に數語を加ふるの必要あるも、如何なる讚辭の最も適當なるかは、暫く疑問とし後に残して可なり。

—『日本及日本人』—

偉人尊重の根本義

○偉人尊重の根本義

徳育に就て議論の一致せざれど、古來の偉人の尊重すべくんば、其の根本義は誘惑に抵抗するを教ふるに在り。釋迦は山に入りて惡魔の誘惑に抵抗し、耶穌は沙漠に在りて惡魔の誘惑に抵抗し、アダム、エバが惡魔の誘惑に従ひしが即ち人類の神に苦めらるゝ所以と傳ふるが如き、皆な誘惑に従ふの最も戒むべきを言へるなり。漠然として忠君を説き、漠然として愛國を説くも、影響の漠然たるや知るべし。金錢の爲めに節を二三にし四五にしては、何程思義振るとして少しの益なく、忠義振れば振るほど愈々危険なり。苟も信ずる所、一貫して替はらざるの態度ありてこそ、初めて頼母しとすべけれ。 —『日本及日本人』—